暗殺魔法士
＃２
―真夜中の夜騒会―

古見蔵しか

1　思惑

【水】の宗主オアネス・サドゥは朝からとにかく不機嫌であった。

朝食もそこそこに取ると彼は書斎に一人こもり何をするわけでもなく机の上を指でとんとん叩き何か物思いにふけっていた。

彼がこれほどまでにも落ち着かないのにはある理由があった。

それは今日――ある魔血貴族の屋敷で盛大な夜会が開かれる運びになっているからだった。

魔血貴族たちは毎晩何かしら集まっては会合を持つのは日常茶飯事。だがそれ以上に【水】の宗主が警戒するほど今回の夜会には別の色があった。

それは同盟関係である【火】と【風】の有力貴族たちが一堂に会するという【水】にとってはこの上なく警戒すべき大夜騒会が今日リカルト・ミュラーニッヒ子爵の豪勢な屋敷で執り行われる――それを聞くだけでもサドゥ卿は憂鬱な気分になった。

一体奴らは今日の夜会で何を企んでいる？　【水】に対する次なる牽制？　それとも議会をより有利に進めるための謀略？　否、もっと陰惨な火種をこちらに投げ込むつもりか？

嫌な想像ばかりが色々と浮かんでは消える。それほど今宵の夜会はサドゥ卿にとって政治的にもかなりの重しになっていた。

【火】と【風】どもの夜会などいっそこちらの手で潰してしまいたい――そう言えば最近そんな事をとある男の前でついつい愚痴となって零してしまったような気がする。

その男は言った。潰すだけなら簡単ですよ――と

その瞬間――書斎のドアのノック音が甲高く室内に響いた。

サドゥ卿は驚いた様子ではっと目を見開いたがすぐに平常心を取り戻しドアの向こうの人物に「入れ」と小さな声で命令した。

白いドアはゆっくりと開いた。そこから出てきたのはいつかサドゥ卿が愚痴を漏らした相手――イスラーグ・ジェラール大佐その人だった。

「サドゥ卿。今日もご機嫌が麗しゅう……」

「そんな挨拶どうでもいい」

　サドゥ卿は神経質そうな声でそう言ってイスラーグの挨拶を遮った。

「お前、今日が何の日かわかっておるな」

「今日――ですか？」

　そう言うとイスラーグは訝しげに眉をひそめた。

「そうですね……僕の記憶が正しければ今日は【火風同盟】の大きな夜会が行われる日だと思うんですが……」

「ほう……ちゃんと把握しておるではないか」

　そう言うとサドゥ卿は手を組みなおすとイスラーグを灰色の瞳で睨んだ

「わしがいつか言ったことは覚えておるか？　その夜会を潰すことはできるかと――よもや忘れたとは言わせないぞ？」

　その言葉を聞いてイスラーグは少し困ったように笑って見せた。そして緑と青の涼やかな瞳でサドゥ卿を見据えた。

「安心してください。忘れてなどいませんよ」

「ではもう手は打ったのか!?」

「あなたの命令にしては今回は簡単すぎる任務でしたね。夜会の１つや２つ潰すことなど非魔血の暗殺者を一匹放つだけでも十分すぎるほどの効果を出しますよ」

　憂鬱なサドゥ卿に変わりイスラーグはいつもと同じように冷静沈着だった。

　だがサドゥ卿はまだ今回の夜会の件で引っかかることが一つ二つ残っていた。

「本当に大丈夫なのか？」

「え……？」

「噂によると今日の【火風同盟】の夜会では重大な発表があると聞き及んだ。奴らが何を企んでいるかはわからぬがどちらにしろ【 水(こちら) 】に害のある話であろう――」

　その言葉にもイスラーグは物怖じする素振りなど見せず淡々とした口調で話し出した。

「ええ、僕が知り得るには同盟をさらに強固な物にするため政略的な婚約発表が行われるそうですね」

「何だと!?」

「おや？　サドゥ卿はお知りになってないのですか？」

　その一言にサドゥ卿は苦虫を噛みしめたような顔で沈黙した。

　それを見てイスラーグはなるべく彼の顔を潰さないように言葉を選びながら続きを話した

「彼らの考えることは単純ですよ。【火】と【風】の同盟のため何年かごとに繰り返してきた政略結婚をまたやろうという魂胆ですよ。でも今回の相手は少し分が悪いかも知れませんね……【火】の宗主ティアマート家のご令嬢と【風】の盟主エアグレース家の――」

「何っ!?ティアマート家の娘だと？」

　その言葉を聞いてサドゥ卿は椅子から跳び上がった。そして血相を変えたようにイスラーグを睨んだ。

「つまり『烈火の剣聖』自らの娘を政略結婚の出汁にするというのか？」

「まあ……そう言うことですね」

　イスラーグはそう言うと少し困ったように笑った。

　それを見てサドゥ卿の顔色はどんどん紅潮していく。怒り半分不安半分と言ったところだろうか。

「これはまずい。まずいぞ！　イスラーグ！　この政略結婚が今日の夜会で正式に発表されると

奴らの同盟関係はさらに強固なものとなるであろう。宗主自ら娘を差し出すのだから奴らは本気だ」

　興奮気味で話すサドゥ卿とは正反対にイスラーグはいつものように冷静な眼差しだった。

　そしてまた少し困った様子で小さく笑いながら言った。

「だからその夜会を潰さなければならない。そうでしょう？サドゥ卿」

　その一言を聞いてサドゥ卿は思わず息を呑んだ。

　一瞬だけだがイスラーグの本気を垣間見たような気がした。

「先ほども言ったように夜会自体を潰すのは簡単なこと――だけど今回は確実性を伴われる。それに屋敷も巨大ですし、非魔血の暗殺者ごときが騒いでもそれほどの事態にはならないかも知れません」

「では……どうするというのだ」

「あちらにより深刻な事態に陥れるため僕はより強力な『武器』を投入することにしました」

　その一言を聞いてサドゥ卿はゆっくりと椅子に座ると小さな声で一言言った

「暗殺魔法士か……」

　その言葉を聞いてイスラーグはニッコリと微笑んだ

「彼には適当に暴れろと言っておきましたが、あまり納得してないようですね。彼はかなりの完璧主義者だから醜い仕事は好かないのでしょう」

　そう言うとイスラーグはサドゥ卿を緑と青の瞳で見据えると小さくため息をついた

「とは言えここで彼の好むスマートな暗殺（しごと）をされても困るので、この前捕まえた金の卵を付属で付けることにしましたよ」

「金の卵――？　この前のベアール家の嫡男を殺した墓守か？」

「ええ、彼はこの仕事にはずぶの素人ですが、素人が混ざっていた方が騒ぎになりやすいでし

ょう？」

　何という計算高い男だろう――イスラーグの言葉を聞いてサドゥ卿は思わず生唾を飲んだ。

　それと同時にこの男が自分の味方であることに大きな感謝さえも覚えた。

「サドゥ卿。安心してください。彼らが暴れるだけで貴方が忌み嫌う夜会は吹っ飛びますよ」

「ああ……それは助かる」

「明日には貴方にいいお知らせが出来るでしょう。それまでどっしり構えて待っていてください」

2　初任務

ニューヒース河の西岸。魔法帝国の中心を成す魔血たちの街。

厳つい石造りの　境界の橋（ボーダーズ・ブリッジ）　を渡りきるとそこは別世界だった。

眩い街頭、美しい石畳の道路、蝋細工のような建物たち――見る物すべてが極端に華やかで反吐が出るほど豪奢だ。

いつも思う。この街に来るとすべてを破壊したい――と。

この街の隅から隅まですべてが嫌いだ。本当なら足だって踏み入れたくない。

一体幾万の非魔血たちの血と汗と涙がこの魔血たちの絢爛豪華な街の下に染みこんでいるのだろう――それを思うだけでレヴィは身体全体が彼らの怒りと悲しみで包まれる思いだった。

でも、自分が怒ったって仕方がない。

自分は魔血でも非魔血でもない。見た目の肌が、流れている血が違うから、どちらにもなれない。どちらにも混ざれない。どちらにも味方が居ない――

魔血は憎い。憎いけど非魔血が思う憎しみと自分が思う憎しみは根本的に性質が違うだろう。

この街が憎悪の固まりに思えるのもおそらく――非魔血が思う憎悪とは違う。

違うと思うのだけどそれがどう違うのかは今のレヴィにはよくわからなかった。

瞼に浮かぶのは幼い自分が母に手を引かれこの街に足を踏み入れたあの瞬間。

あの時と気持ちは変わらない。あの時と同じようにこの街は畏怖の対象のままだ。

そしてその時植え付けられた訳のわからない畏怖と憎悪がすべて自分を突き動かしている――レヴィはそんな気がしてならなかった

絢爛豪華に眩い街灯が照らす中、レヴィはその街灯の裏の闇を縫うように目的の場所へと歩いて行く。

道は徐々に開け、やがて宮殿のような大邸宅がずらりと並ぶ界隈にでていた。

相変わらずだが目がちかちかするほど眩い屋敷たちばかり。しかも悪趣味な彫刻や装飾で飾り立てられ威圧感だけは一人前だ。

その中でも今日の標的であるミュラーニッヒ邸は一際豪奢で煌びやかにレヴィの真紅の瞳にはくっきりと映った。

煌々と炊かれた光の中をひっきりなしに魔血貴族を乗せた馬車が到着する。

そこから出てくるのは眩い光にも負けないほど業火に着飾った魔血の紳士淑女たち。

見ているこちらがくらくらと目眩を起こしそうなくらいそこは別世界の輝きに満ちあふれていた。

――破壊したい。

レヴィは思わず拳を握る。

その衝動は魔血が憎いという心より別の所からあふれ出した。

破壊――それこそが自分に架せられた使命。まだ見ぬ父親から与えられた魔法の血がそれを望んでいる。

身体の内から燃え上がる炎を感じながらレヴィは眩い標的を見つめ一つ大きく深呼吸した。

呼吸を整え、気持ちを落ち着かせ、これからの仕事に入るために精神を統一して――

そしてゆっくりと瞳をあけたその時――レヴィは聞き慣れない声に呼び止められた。

「レヴィ？」

その声にレヴィは訝しげな表情で振り向く
そこにはわがままな 依頼者(クライアント) から押しつけられた『相棒』ザガロ・ディアルグレイが立っていた

「ああ……何だ。来てたの――!?」

だがレヴィはザガロの異変につぶさに気づき、その顔に驚きを隠すことが出来なかった。

――何だ、コイツ……昨日とは別人じゃないか？

見た目だけでは腕から伸びるタトゥみたいなアザが首や頬まで浸食してるだけしか違いはない

だが昨日のザガロとは比べものにならないほど魔力の質が大きく向上しているのが感じられる

『覚醒』――すなわち幼少の魔血たちが血に目覚めて魔力がぐんと強くなるという現象に近いのだろうか？

しかし、ザガロは自分と同じ１８歳――血に目覚めるにしては少し遅い気もしない

否、しかしそれが【死】の血では当たり前かも知れないし――それにしても余りにも変わりすぎてるというか……

「ねえ！　レヴィ！　どうしたの？　僕の顔ばかり見つめて――」

「いや……何でもないけど……」

そう言うとレヴィは納得いかない表情を浮かべながら一言聞いた？

「お前、昨日あの後何かあった？」

「え？」

「いや、お前さ昨日と変わったような気がして――変わったことでもあったのかなー？と……」

その言葉を聞いてザガロは思いっきり態度で言葉を出した。

彼の中では絶対勘ぐられないと思ったのだろう。顔の表情を見てるだけで答えは明白だった

「……まあいいや」

そんな彼を見てレヴィはひとつため息をつくと表情を変え前を見た。

その先に広がっているのは煌びやかに彩られた広大な屋敷――今日の仕事の舞台ミュラーニッヒ邸だ。

「うわあ……めちゃくちゃ広いじゃん……」

　ザガロは鉄柵に顔を埋めるかのように柵の中を凝視していた

「だから言っただろ……お前の墓地より広いって……」

　レヴィは呆れたようにため息をつきながら言葉を返した。

「こんなところよく一人で襲おうなんて無茶だよ」

「んなこと言われたって……俺は今まで一人でやってきた――」

「やっぱり僕が一緒にいた方が絶対楽だよ。よかったね。レヴィ」

　ザガロのその言葉にレヴィは思わず沈黙してしまう。

　どちらかと言えばあきれ果てた沈黙といった方が正しかった。

「――あのなあー！　お前はまだずぶの素人なんだから勝手に相棒扱いするな！」

「なんで？　だってこんな広い屋敷で標的なんて見つけるの至難の業だよ？」

「二人で探した方が効率が良いとでも言いたいのか？　馬鹿かお前は！」

　そう言うとレヴィはザガロの前に立つと指で差しながらすごい剣幕で怒鳴りだした。

「いいか？　暗殺ってのは誰にも気づかれず風のように命をかすめ取るのが理想の仕事なんだ。お前みたいな素人がうろちょろされちゃあそんな仕事出来るもんも出来なくなるだろ」

「でも……」

「イスラーグがなにを企んでお前をよこしたのかは知らないが、俺はいつも通り自分の仕事をするだけ。だからお前は――！」

「邪魔をするな……でしょ？」

　一番言いたいことをザガロに先に言われ、レヴィはまたしても押し黙った。

　どうもこいつと話しているとペースを持っていかれる……

　それが不満でレヴィはますます不機嫌になった。

「もういい……こんなところでお前と問答するのがバカバカしくなった。さっさと仕事に移ろう……」

「でも――こんな大きなお屋敷どうやって潜り込むんだろう？今日は重要な夜会が行われてるわけだから警備だって分厚いはず――」

　ザガロがそう言ってる間にレヴィは少し先に進んでいく。

　そしてすこし周囲を警戒した後、自分の脚力だけで高い塀を乗り越えた

「って……ちょっと待ってよ！」

　それを見てザガロは少し焦ってレヴィの後を追うように塀によじ登った。

　そして乗り越えようとしたその時だった――

「え――？」

　ザガロは思わず背筋を凍らせた

　目の前に魔血の警備兵が立ちふさがり思わず目が合ってしまったのだ。

　いきなりピンチ？と肝を冷やしたその瞬間、警備兵は素早く真っ黒な影に襲われた

　その速さはまるで獣の如くと言ってもよく、警備兵自身もおそらく何があったかなどわからないまま絶命した。

「ったく……ホントにお前はどこまでも足手まといだな……」

　警備兵を一撃で昇天させたレヴィは血の滴った短剣を鞘に収めながら塀の上で固まってるザガロを睨み付けた

「そんなこと言われたって……僕は初めてなのに――」

「はいはい。弱音を吐くのはそのぐらいにしておこうか。もうここからは戦場と同じなんだからな」

　そう言うとレヴィは先ほど倒した警備兵の遺体にゆっくりと近付いていった

　そして血の気の失せた顔をじっと凝視し、そして指でゆっくり撫でていった

「レヴィ？」

　ザガロは塀の上から飛び降りるとじっと動かないレヴィの側へと歩んだ。

　そして顔をのぞき込んだ瞬間ザガロは思わず仰天した。

「え――？」

　その瞬間レヴィの顔は思わぬ方向へ『変化』した

　褐色の肌は真っ白な肌に。黒く短い髪は金髪の長い髪に。凛々しい真紅の瞳は細めの紺碧の瞳に。

　顔だけでなく身体付きも変化し、服も警備兵の制服に替わっていった。

「これでよし……と」

　先ほど殺した魔血警備兵に変化魔法（メタモルフォーゼ）したレヴィはゆっくり立ち上がり感覚を確かめるように手を動かした

　あまりの手際の良さを目の当たりにしてザガロは流石としか感想が出なかった。

「さーて、これでやっと潜入準備完了だぜ」

　そう言うと魔血警備兵になりきったレヴィはまるで周辺警備の任務に戻るかのように庭園の奥へと歩いて行こうとした

　それを呆然と見ていたザガロだが流石に焦りだした

「だから！　ちょっと待ってって言ってるじゃん！」

「じゃ、あとはお前で何とかしろよ――」

「だーかーら!!　置いてきぼりなんて――!!」

そう制止してもレヴィはお構いなしに歩みを止めようとはしなかった。

やがて魔血警備兵になりすましたレヴィは暗がりへと消えていく。

ザガロはその様子をただ呆然と見ているだけしか出来なかった。

３　同盟繁栄のための結婚

シャンデリア光る煌びやかなホール内に流れる管弦四重奏。
すれ違う紳士も淑女も皆豪華な衣装に身を包み、何が楽しいのか笑っている

　ミュラーニッヒ邸に集まりし【火】と【風】魔血貴族たち――

　彼らの目的は一組の若いカップルの誕生の瞬間を見届けるため。

　俗に言う【火風同名】が今よりもっと強固になる瞬間を見届けるため――

「はあ……」

　ミュラーニッヒ邸の一室でソファーにもたれながら黄色いドレスを着た栗色の髪の少女アイリス・ラキア・ティアマートは深いため息をついた。

　そのため息の訳――それはとても複雑な要因が混ざり合ったものなのだが大きな理由は２つある

　１つは今日の夜会の内容。

　表向きはアイリスの社交界デビューの場なのだが、その真の目的を知ったのは会場に着いてすぐだった。

『アイリス……今日の夜会はあなたが主役ですのよ』

　会場に着くなりアイリスの母シエラは態度を急変させた

　まあ、ここに来る前からシエラの態度はおかしいと言えばおかしかった。

　今日の夜会のために入念に下準備をして、アイリスの衣装や装飾はすべてオートクチュール。

　今日まで何回衣装の打ち合わせをしたか数えるのも嫌になるくらいだった。

　アイリス自身そこまで気合いを入れる母の姿をすこし懐疑的に見ていたが、案の定この夜会にはアイリスの社交界デビュー以外にも大きな理由があった。

「どうしたの？アイリス」

不機嫌そうな表情を浮かべソファに座っているアイリスを見て藍色のシックなドレスに身を飾った母シエラは声をかけた。

だが、アイリスは母に顔を合わせず素っ気なく答えた。

「別に……」

アイリスははっきり言って母とは会話したくなかった。

それだけ彼女の中にシエラに対する不信感がこの夜会で増大していた。

「あなた、まだ怒ってますの？　いい加減諦めたらどう？」

「諦めるって――何を？」

「いい、アイリス。これはあなたが生まれる前から決まってたことですの。あなたとジェイナスは昔から許婚前提のおつきあいをしてたはずですわ。それはあなたがいちばんわかっているんじゃない？」

それを聞いてアイリスは母と会話するのも嫌になってそっぽを向いた

そう、今日の夜会は他ならぬアイリスの婚約発表の場だった。

しかも相手は今まで幼馴染みとして親しくしていたアイリスの従兄ジェイナス・エアグレース。

別に幼馴染みとの婚約は不満ではない。まあ、ジェイナスを婚約相手と思えるかどうかと言われたらNOではあるが――

アイリスが不満だと思っているのは母が幼馴染みとの婚約を【火風同盟】をより強固なものにするために利用していると言うことだ。

アイリスは【火】の宗主ケンヴィード・セラフ・ティアマートの一人娘。一方ジェイナスは【風】の有力貴族オリオール・エアグレースの弟君。

これほど誰から見ても見えきった『政略結婚』はないだろう――

「お母様……」

　しばらく沈黙していたアイリスだったがふとぽつりと母を呼んだ。

「この婚約……お父様は了承してるの？」

「あら？」

　その問いにシエラは何か含みを持った笑みを浮かべ答えた。

「そんなの当たり前の事ですわ。あなたが赤子だった時からケンはそのことを了承してましたわ。あなたとジェイナスが結ばれる事によって【火風同盟】が更に結びつきが強くなることはこの帝国の宰相に上り詰めようとしているあの人にとってもプラスなのは目に見えてますわ」

「……」

　母のその回答にアイリスはさらに気持ちが暗い方へと落ち込んだ。

　それだけは嘘であって欲しいかった――父ケンヴィードだけはこの婚姻を反対して貰いたかった。

　なぜなら政略結婚の成りの果てを一番身にしみてわかっているはずなのがケンヴィードのはずだからだ。

　父ケンヴィードと母シエラも自分と同じように親同士が【火風同盟】のために用意した婚姻で結婚した。

　だけどアイリスが物心着いた頃にはもう二人の間は冷め切っていた。

　父は政界で権力を付けることに執念し、母はその寂しさを紛らわすように社交界で華麗に遊ぶことに執心した。

　年を追う事に家で二人顔を合わすことさえもなくなり、アイリスは多感な時期を寂しい思いをして成長してきた

　だからこそ思った。同盟のための政略結婚なんてまっぴらご免だと――

「アイリス……どうしてそんなに機嫌が悪いの？」

　その声をかけたのはアイリスの『許婚』とされた相手、幼馴染みのジェイナス・エアグレースだった。

「もしかして……僕が婚約相手っていうのが嫌なの？」

　不安げにそう聞いたジェイナスを見てアイリスは初めて表情を和らげ微笑んだ

「ううん。そうじゃないの」

「じゃあどうして――」

「ただ、私――お父様とお母様のようになりたくないだけ……ただそれだけよ」

「あら？　私たちみたいになりたくないから反抗しているわけですの？」

　シエラのその言葉にアイリスは再び押し黙った。

　だが、シエラの饒舌はとまることなく、彼女は扇を仰ぎながら言葉を続けた。

「あなたは勘違いしてますわ。私とケンはいわばビジネスパートナーみたいなものですわ。お互いに理があるから今までこうして二人で歩んできたのですわ。私たちが居なければ今の繁栄した【火風同盟】はなかったですわ」

　何がビジネスパートナーなのだろう――アイリスは母の言葉に強い不満を抱いたが反論するのも馬鹿馬鹿しくなって押し黙るしかなかった

「ですけど……ケンはどうしてこういつも遅れるのでしょうね……」

　母は扇を強く仰ぎながら一言そう漏らした

　そう、アイリスたちが控え室でこうして待機しているのはこの夜会の主役の一人ケンヴィードの到着を待っているから――

　しかし、夜会が始まって数刻――ケンヴィードは一向に会場に現れる気配はない。

「今日こそは遅れずにここに来るようにって念には念をおしてきたのにどういう訳かしら？あの人は自分の娘が上る晴れの舞台を台無しにするつもり!?」

シエラの語気が一段と強くなる。彼女は夫の到着が遅れていることに激しい苛立ちを感じているようだった。

「まあまあ、落ち着いてくださいなミセス・ティアマート」

そうシエラをたしなめたの小さな身体の魔血貴族リカルト・ミュラーニッヒ。今日夜会の主催者だった。

「これが落ち着いてられる状況とお思い!?」

「しかしそうカリカリしててもティアマート卿は来ませんでしょう」

「大体ケンは社交界が嫌いとか言って、いつもこういう場所を避けてばっかり――名門ティアマート家の当主とは思えない愚行ですわ！」

でもそう言うところがお父様の良いところなんだけどな――苛立ちを露わにする母を見ながらアイリスはすこし口元を緩ませた。

父の到着が遅れていることはアイリスにとって唯一の救いだった。

遅れれば遅れるほどこの政略結婚の発表が遅れてくれるのだから――

「私――ちょっと外の空気吸ってこようかな……」

アイリスはそう言うとソファから席を立ち歩き出した

「アイリス、どこへ行く気ですの？」

そんなアイリスを見てシエラ強い口調で注意した。

「ちょっと外にでるだけよ」

「ダメですよ。まだ婚約発表の時が着てませんわ！」

「いいじゃない。別に隠してるわけじゃないんだし……」

　そう言うとアイリスはシエラの制止の言葉も聞かず部屋から出て行った。

　正直今母シエラと一緒の空気を吸っていたらこちらの身が持たない――アイリスは強くそう思った。

　扉をバタンと閉めるとアイリスはもう一つ大きなため息をついた。

　そしてドレスの裾を引きずりながら裏庭の方へと廊下を歩いて行った。

　さすが特注のドレスだ――動き心地は最悪、もう一人自分を抱いて歩いているような感じだ。

　正直こんな綺麗なドレスを着てもそんなに感動はない。行動が制限されてしまうこんな服より普段の動きやすい服装の方がずっと身軽で気持ちが良い。

　おそらく自分には社交界の薔薇と言われてる母シエラの血よりも社交界嫌いの父ケンヴィードの血の方が濃いのかも知れない。

　綺麗なドレスに身を飾ってただ奥様同士で上べっつらな会話を繰り返すなんてまっぴらご免だ。

　自分はもっと自由に生きたい――家柄、血すべてなしにして鳥のように自由に――

「――アイリス、待って」

　そう呼ばれてアイリスはふと足を止める

　そこには許婚と勝手に決められたジェイナスが駆けてきた。

「お母様の言いつけ？」

　アイリスは警戒したようにそうジェイナスにそう聞いたが、彼は顔を横に振った。

「違うよ。自分の意志だよ」

　ジェイナスはいつもと同じ頼りない笑顔を浮かべた。

　逆にそれがアイリスにとって安心を覚えさせた

「よかった。もし、お母様の言いつけだったらあなた張り倒してたわ」

「――相変わらず血の気が多いな。アイリスは」

　その言葉にジェイナスは呆れたように笑った。

『許婚』とされたジェイナスだけど彼自身はアイリスは『好き』だった。

　ただそれは幼馴染みとしてのジェイナスが『好き』なのであり、決してそれは恋愛感情を抱くような『好き』ではなかった。

「ねえ、ジェイナス――あなた、私のこと好き？」

　人気のない裏庭にでたアイリスは隣に立ったジェイナスに一つそう聞いた

「え――？　なに？　いきなり藪から棒に……」

「答えて。私のこと好き？」

　その問いにジェイナスの顔は一気に紅潮していく。

　そして恥じらうように目を伏せてをもじもじと組み直しながら小さく答えた。

「好きだよ……」

「ホント？」

「ホントに決まってるじゃないか！」

　ジェイナスは顔を真っ赤にさせて思わず声を荒げる

　それは予想外に周囲に響き渡り、その反響にジェイナスはハッと我に返ってさらに顔を紅潮させた

「ごめん……」

「何謝ってんの？」

　アイリスはそんなジェイナスの真っ赤な顔をのぞき込みながら笑った

「あーよかった。後少しでお母様のせいでジェイナスが嫌いになるところだったわ」

「え……？」

「だってさ……幼馴染みのあなたを許婚として意識できない……否、意識できないもん」

　そう言うとアイリスは少し俯いて言葉を続けた。

「大人って本当に勝手だよね。こっちの都合なんかお構いなしに何もかにも進めようとするんだもん……」

「今回の件は仕方ないよ……」

「仕方ない？　あなたそれで済まそうとしてるの!?」

　いきなり顔に怒りを見せたアイリスを見てジェイナスは驚いたように訂正した

「そうじゃなくて……向こうには向こうの都合があるし……僕たちが反抗したってできるわけないよ」

「そうかもしれないけど……私はお母様のやり方が許せない。今まで幼馴染みとして仲良くしてたジェイナスを無理矢理許婚だなんて……」

　そう言うとアイリスはジェイナスの手を取った

　いきなり手を握られたジェイナスは思わず驚きの表情を浮かべた

「ねえ、ジェイナス。私は幼馴染みとしてのあなたが好き――だけどそれは結婚相手としての好きとはちがうの。だから……」

「だから？」

「この婚約発表の後も幼馴染みとして好きのままでいさせて……そして、あなたも幼馴染みとし

て好きな私を見て……」

　少し身勝手なお願いだったかも知れない――

　そう思う前にアイリスは自分の思っている言葉を一気に吐き出した。

　それに対してジェイナスはニッコリとわらい握られた手を握り替えした

「いいよ。君がそれでいいのなら僕は君に合わせるよ」

「ホント!?」

「ホントだよ……それに」

　そういうとジェイナスはちょっと伏し目がちに俯いた。

「その方がきっとうまくいくだろうし……」

「ありがとう！」

　アイリスはそう言うとここに来て初めて満面の笑みを浮かべた

　それを見てジェイナスも釣られて笑った。

　アイリスはやっと大きな不安から解放されたような安堵感を覚えた。

　どんなに逃げたって婚約発表はもう目の前に迫っている。

　だけどいくら許婚とされようと自分とジェイナスの関係が変わらなければ大丈夫だ――アイリスはそう信じてやまなかった。

　そんな、和やかな空気が流れてる時だった――

　薄暗い裏庭の木陰。そこから人影らしきものがアイリス達の前を横切ったのだ。

「え――？」

　一体それが何なのかはわからなかった。

　だけど一つ言えるのはその影が大きく人のようだった――それだけだった

「どうしたの？アイリス？」

　驚いたようなアイリスを見てジェイナスは彼女を顔をのぞき込んだ。

「今――そこの木陰から人が飛び出したのを……見た」

「え？　ホントに？　見間違いじゃない？」

「ホントだってば！　ついさっき何か走り抜けたの！」

　そう言うとアイリスはもう一度薄暗い裏庭に目を凝らした

　だけどもうそこには怪しい影は消えて無くなっていた

「なんだろう、今の――」

　アイリスはその瞬間激しい不安を覚えた。

　なんだろうこの胸騒ぎは――嫌な予感しかしないのは何故だろう。

　その瞬間、アイリスは踵を返し廊下を走り出した。

「あ……アイリス、待って！」

　ジェイナスの制止の声も聞かずアイリスはただ一人廊下を疾走した

　特注のドレスの重さもあってあまり早くは走れないけれどどうしてもいてもたってもいられなかった。

　あの影の正体を突き止めるまでは――

　その時だった。

「きゃっ！」
　その瞬間アイリスは四つ辻で出会い頭に誰かと正面衝突した

　はっと前を見ると浅黄色の短い髪に白色のドレスを着た魔血の娘が倒れていた

「ごめんなさい。大丈夫？」

　アイリスはそう言うと彼女に向かって手をさしのべた

　だが次の瞬間、彼女は浅黄色の髪を振っていきなり立ち上がった。

　アイリスはその怒りに満ちた瞳を見てハッとした。彼女の瞳は金色と紫色のオッドアイだった。

「暗殺者――!!暗殺者はどこ――!!」

「え……」

　その一言を聞いてアイリスは心を凍らせた。

　だは彼女はその言葉をつい口滑らしたのか次の瞬間「いえ、何でもないの……」と言い残し足早に立ち去っていった。

「暗殺……者……？」

　その言葉を譫言のようにアイリスは繰り返した。

　ふと目の前を見ると一通の封筒が廊下に落ちていた。

　先ほどの魔血の少女が落としたものだろうか――アイリスはその手紙を拾い上げた。

　驚いた――その手紙の宛先の名はアイリスの父ケンヴィード・セラフ・ティアマートだった。

　先ほど裏庭を横切った影、オッドアイの魔血の少女が口走った『暗殺者』という言葉、そして父宛の手紙――

　繋がらないはずの点と点が線として繋がろうとしている。そんな胸悪い予感がアイリスを襲っていた。

アイリスは少女が落とした手紙を丁重にしまうと、その少女の後を追うように廊下を駆け出した。

この夜会で何かが起きようとしている――その胸騒ぎに背中を押されながら。

４　任務成功――と思ったら

　心地よい管弦四重奏が流れ、振り返れば煌びやかな衣装をきた男女が単調なダンス繰り返す

　宴の舞台となっているミュラーニッヒ邸の贅をこらした大ホールは紳士達がまき散らす煙草の煙と淑女達がまき散らす粉おしろいと香水の匂いが充満して、もう居ても立っても居られない空気が流れている。

 レヴィはわからなかった。魔血貴族たちがどうしてこんなにつまらない事で盛り上がり下品に笑い飛ばし合うのだろう。

まあ、そんな理由などわかりたいなどまっぴらご免ではあるが――

　レヴィの目には此処にあるすべての存在が醜悪に見えてならなかった。

　豪華なシャンデリアも、美しい調度品も、煌びやかな衣装の貴族たちも、単調なダンスも、なにもかもすべて――壊してやりたかった。

　でも、今は我慢だ――

　今、レヴィは途中で始末した魔血警備兵に変化（メタモルフォーゼ）している。

　この身体さえ借りればどんな大邸宅もどんな警備の穴も簡単にぬけられる

　現に今、こうして夜会会場のど真ん中にこうして何事もなく堂々と立っていられる。

　魔血は本当に馬鹿な生き物だ。人の判断を肌の色、服の質でしている輩ばかり。

　こちらがそれに合わしてやればお仲間だと思い込んで全く警戒しない、だからこそこの魔法は強く光るのだ。

　魔血警備兵の皮を被ったレヴィはすっと踵を返し宴が模様されてる大ホールを抜けていきそして出口の扉付近へと歩んでいった。

　その時、扉付近を警備していた魔血警備兵がレヴィのことをじろっと睨んだ

「お前、持ち場はどうした!?」

その魔血警備兵はえらくレヴィを警戒し強い口調で怒鳴りつけた。

だが、レヴィは下手に臆することなく堂々とした態度で答えた。

「――ミュラーニッヒ子爵に報告があります」

「報告だと……俺は聞いてないぞ」

魔血警備兵は更にいぶかしがった様子でレヴィを睨む。

――仕方がない。危ない賭けだが言ってみるしかないか……

「ここだけの話ですが……」

レヴィは潜んだ声でそう言うと魔血警備兵の耳元で囁いた

「この邸宅に不審者が侵入した模様で……その旨をミュラーニッヒ子爵にご報告を――」

「何？　侵入者――だと？」

その言葉に魔血警備兵は強く反応した

そして、しばし考えた後レヴィに道を譲った

「行け……」

その言葉にレヴィは魔血警備兵に見られない様に密かに笑った。

これくらい軽い――と。

しばらく廊下をゆっくりと歩きながらレヴィは獲物を探す

特に依頼者（クライアント）に頼まれたわけではないが、レヴィの中ではもう狙う獲物は心の中で決めていた。

今日の標的（ターゲット）はこの夜会の主催者であるリカルト・ミュラーニッヒ本人だ――

　やがてレヴィは多くあるミュラーニッヒ邸のある部屋にたどり着く

　やっぱりこれは長年の勘というか、動物的本能というか――ここは怪しいと思った瞬間レヴィは一つ間を置いて扉をノックした。

「なんだ？　入れ」

　扉の向こうの人物は大して確認もせずにレヴィを扉の向こうへと誘い込む

　これだから魔血は警戒心がない愚かな生き物なんだ――そう嘲りながらレヴィは扉を開けた

「んまあ！　あなた何者ですの!?」

　その瞬間声を荒げたのはソファに座っていた紺色のドレスを着た魔血のご婦人。

　レヴィの姿を見るなりにいきなり不機嫌な表情を浮かべた。

「ちょっと。子爵……余りにも失礼じゃありませんか！　この私の前で警備兵を部屋に招き入れるなんて!!」

「ああ、これはとんだ不手際をミセス・ティアマート……」

　そう言い急いで取り繕う小男の魔血貴族がおそらくこの夜会の主催者であるリカルト・ミュラーニッヒであろう。

　しかし、この男が言うにはこの魔血のご婦人があの『社交界の薔薇』と言われるシエラ・ティアマートだとはちょっと嬉しい誤算だった。

「もう、業務連絡は手短にお願い遊ばせ！」

　そう言うとミセス・ティアマートは扇を取り出すと不機嫌そうに自分の顔を扇ぎだした。

　ミュラーニッヒ子爵は彼女に何度も礼をしたあとレヴィの方を睨み付けこちらに駆けつけた。

「何だね！　こういう重要の時に!!」

　ミュラーニッヒ子爵は強い口調でレヴィを叱りつけた。

　この男、うだつの上がらないミセス・ティアマートの前で失敗はしたくないのか、なにもかも必死に見える

「いえ、こちらも重要な報告がありまして……」

「それは何だね！さっさと言いたまえ！」

　その言葉を聞いてレヴィはミュラーニッヒ子爵の耳元で囁いた

　彼にわからないように口元に笑みを浮かべながら――

「屋敷にどうも暗殺者が侵入した様子です」

「……何？」

　その言葉を聞いてミュラーニッヒ子爵の顔色が一気に変わった

　一瞬紅潮したと思ったら一気に真っ白に――急高下するかのように彼の頭は混乱した。

「どうなさいましたの？子爵？」

　その後ろではミセス・ティアマートが優雅に扇を扇いでいる

　ミュラーニッヒ子爵の顔からたくさんの汗が流れて落ちた。

「ミセス・ティアマートの事もありますし、ともかく……場所を変えましょうか」

　レヴィのその提案にミュラーニッヒ子爵は受諾した――否、受諾するしか彼に道はなかった。

「ミセス・ティアマート。少しばかり失礼をば――!!」

「ちょっと!!　子爵！　どこへ行く気!!」

　ミセス・ティアマートの怒鳴り声が響く中ミュラーニッヒ子爵はレヴィと一緒にそそくさと部屋を出て行く

　ここまで来ればもう獲物は射程内に入ったも同然。

　後は人気のない部屋に誘い込んで後は一気に――

　ミュラーニッヒ子爵は闇の帳が落ちた空き室にレヴィを招き入れる。

　そして扉を閉めた途端、人が変わったように怒気を荒げてレヴィを睨み付けた。

「なんたる失態だ！この無能め!!」

　まるで溜まりに溜まった怒りを爆発させるようにミュラーニッヒ子爵はレヴィに怒鳴り散らした。

「今日がどれだけ大切な日なのかお前は知っているのか？　あのティアマート家の縁談を今日この我が家で披露される【火風同盟】にとって最重要な日なのだぞ。それなのに貴様らは暗殺者の侵入を許すなどなんたる失態――！　おい！　聞いてるのか!?」

　レヴィはミュラーニッヒ子爵の話を聞いていると可笑しくて可笑しくてたまらなく思わず笑いをかみ殺した。

「貴様――何を笑っている？　ええ！　わしは貴様らの主人であるぞ――!!」

「そんなこと関係ないね」

　その言葉を言った瞬間、ミュラーニッヒ子爵の顔が凍り付いた。

　目の前の『魔血警備兵』は恐ろしい笑みを浮かべそしてパチンと指を鳴らした

　その瞬間、『彼』にかけられた変化魔法（メタモルフォーゼ）は解かれた

　白い肌は褐色の肌へ、金色の長い髪は黒い短髪に、紺碧の瞳は真紅の瞳へ――目の前の『魔血警備兵』は禍々しいばかりの『暗殺魔法士』へと変わった

「ひぃぃぃぃぃ!!!」

　ミュラーニッヒ子爵がどれだけ泣き叫ぼうが、もはやレヴィの牙から逃れられることは出来なかった。

肌の色、服の質だけで人を決めつける魔血だからこそ、このように獲物を簡単に頂ける。

暗がりの部屋必死で助けを求め逃げ惑うミュラーニッヒ子爵をレヴィは何の躊躇いもなく黒い短剣で胸を突き刺した。

「だ……だれか――ッ!!」

苦し紛れに助けを呼ぼうと大声を出そうとしたミュラーニッヒ子爵をレヴィはもう片方の短剣でとどめの一撃を刺した。

飛び散る血飛沫。レヴィはそれを平然とした表情で浴びる。

――よし、ここまでは計画通り。

いつもながら持ち味としているスマートな暗殺（シゴト）を成し遂げすこし悦に入ったその時だった。

「暗殺者だ――!!」

屋敷内で次々と立ち上ったその叫び声を聞いてレヴィはハッと振り向いた

まさか、この潜入がバレた？　否、自分の計画は完璧なはず――

思い付くのは一つだけ――そう、自称相棒とほざくあの素人の【死】の魔血。

「ザガロめ――!!」

レヴィはその瞬間、初めて感情的に言葉を吐き出した。

その怒りは激しかった。せっかくうまく暗殺（シゴト）がうまくいったのに、素人の彼が下手に騒ぎ立てるからどんどん計画が狂っていく。

イライラするのも隠せないが、こうなれば仕方がない――早めに逃げなければ。

レヴィは踵を返すと急いで部屋から飛び出した。

もはや、屋敷内は蜂の巣を突っついたような騒ぎになりつつあった

　レヴィはそんな中廊下を疾走する。こんなところ早く逃げた方が安全に決まってる。

　だが、その時だった。

「きゃっ！」

　四つ辻の角、運悪くレヴィは誰かと激突する

　はっと我に返ったときには浅黄色の短い髪に白いドレスを着た魔血の少女を押し倒しているような状態だった。

「あなた……だれ？」

　彼女が訝しげに顔を起こした。

　驚いた――目の前の魔血の少女の瞳は金色と紫色のオッドアイだった。

「もしかして――あなた――」

　レヴィの身体を汚した血飛沫の後を見て少女の顔にどんどん怒りと恐怖が支配していく。

　レヴィはそんな彼女を問答無用に突き飛ばすと迷わずその場から逃げ出して行った。

５　烈火の剣聖

　そんな大混乱の最中、一人の男が夜会会場に遅れて足を踏み入れた。

　圧倒的な存在感を醸し出す偉丈夫に漆黒のロングコートを美しいほど着こなす彼。

　オールバックにした栗色の髪に口元には丁寧に手入れされた顎髭。真紅の瞳は常に鋭く年以上に若く見えるが威厳は年相応――否、それ以上だった。

「一体何があったのだ？」

　会場に着くなりケンヴィード・セラフ・ティアマートは、その場所の異変にいち早く気づいた。

　色を変えたように急に慌ただしく走り回る警備兵、真っ青な顔をしながらコソコソと内緒話をするご婦人――

　どう見ても同盟強化を祝う晴れやかな夜会の場の雰囲気ではない

「ケンヴィード様――」

　その時、ケンヴィードのすぐ傍らに一人の若い女騎士が跪いた。

　ヴェスタ・オノリコ――ティアマート家私設警備隊の隊長であり、ケンヴィードの腹心だった。

「悪い知らせです。この夜会の会場に暗殺者が侵入した模様です」

「ほう……あちらも面白いことをしでかすな」

　ケンヴィードはこの状況でも何故か顔に余裕の笑みを浮かべた。

　その顔を見てヴェスタは少し戸惑いの表情を出した

「面白いとは……ケンヴィード様は今日がどういう日かお解りなのですか？」

「俺の娘の政略結婚を大々的に発表する日だろ。それくらい解ってるさ」

　その一言にヴェスタは恐縮したように黙って頭を下げた。

「しかしまさか本気で潰しに来るとは思わなかったな。だから言ったのだ。余り派手にすると【水】の反感を買うと――」

　ケンヴィードはため息混じりにそう言うと慌ただしい空気の漂う廊下を歩き出した

「ではケンヴィード様はこの事態を【水】の仕業だと――」

「まあ、アイツならやりかねないな」

　ケンヴィードのその一言にヴェスタは明らかに顔をしかめた

　それだけの言葉で彼女はこの騒ぎの真犯人を直感したようだった。

「まあ犯人を絞り上げるのは後回しだ。今はこの場にいる皆々を安全に帰すことが【火】の宗主である俺の使命だ。ヴェスタ――後は頼むぞ」

「はっ！」

　ヴェスタは威勢よくそう返事するとマントを翻して警備兵を連れ屋敷の奥へと消えていった。

　ケンヴィードはそのまま夜会のメイン会場である大ホールへと進んでいく

　扉を開けるとそこは戦々恐々とした雰囲気だった。

『お知りですか？　暗殺者はミュラーニッヒ子爵を一撃で葬ったらしいですのよ』

『まあ、怖い!?　相手は何人で襲撃してきたのでしょう？　どうせ下賤な非魔血が寄ってたかって襲ったに違いない』

『何でも暗殺者は我々に変装してここまで潜入してきたとか……最近の暗殺者は本当に手口が巧妙としているわ』

　嘘か誠か――この会場内にはいろんな噂話がそこらかしこに飛び回っている。

　これはシエラの思うままの婚約発表どころではないな――そう思うとケンヴィードは不謹慎な

がら少し笑いが出てしまいそうになった。

「あ……ティアマート卿！」

　その叫び声を皮切りにこのホールに集まった紳士淑女の視線が一斉にケンヴィードに向く。

　そして不安から逃れようとするかのように『烈火の剣聖』の前に一斉に集まってきた。

「ああ、これぞ天からの救いだ！」

「あなた様の登場を待ってました！どうか我らをお助けください！」

「お願いです――この騒ぎの犯人をあなたの鉄槌で叩き斬ってくださいまし――そうでないと安心できません！」

　取り囲む紳士淑女達は時折涙を見せ、時折怒りを隠さずケンヴィードに向かい不安を吐き出した

　そんな彼らを前にしてケンヴィードは冷静にそして強い口調で語り出した。

「皆の者、今日の夜会はお開きだ。皆の者にはこれから安全に家路について貰うことが第一の仕事。後の始末は俺に任せて欲しい。だから安心して帰ってくれ」

　その言葉に居並ぶ紳士淑女達は安堵のため息をついたり緊張の糸が解けてそのまま泣き崩れたり――色々な方法で彼らは安心を覚えていた。

「警備担当者はいるか？」

　ケンヴィードのその言葉を聞いて、少々緊張気味の魔血警備兵が一歩前に出る。

「何でございましょう。ティアマート卿」

「ここの主、ミュラーニッヒ子爵と話がしたい」

「それが……」

　そう言うと魔血警備兵は苦渋の色を顔に出す

　それを見てケンヴィードは一瞬で何が起こったのか悟った。

「やられた……か」

　ケンヴィードはそう呟くとそれ以上の詮索をやめた。

　どうやら今回の暗殺者はかなり頭の切れる相手なのかもしれない。

　こうして屋敷の最深部まで潜り込んで主を素早く葬り去るのだから――

「ともかく、これから警備兵は二手に分かれて貰う。一手はエントランスでここの皆を安全に帰すための警備。もう一つは未だこの屋敷に潜伏している暗殺者の捜索確保。皆の帰宅が確認され次第、警備班も暗殺者の捜索確保に加わるように――行け！」

　その号令を聞いた警備兵たちは雄叫びを上げて確持ち場へと散っていく。

　その的確な指示と鮮やかな采配は流石元軍人と言うべきか――そのすばらしさに周りの紳士淑女達から自然と拍手が起きた

「流石ですわね……ケン」

　その声にケンヴィードはそちらを振り向く。

　そこには紺色のドレスを身に纏った妻シエラが立っていた

「シエラ――」

　その言葉を出そうとしたその瞬間ケンヴィードの頬を強い一撃が走った。

　そしてもう一度シエラを見たときは彼女の顔は怒りに満ちあふれていた。

「遅い――遅すぎますわ！」

　周りに沢山の紳士淑女が見ているのにかかわらずシエラは溜まっていた鬱憤を吐き出すようにケンヴィードをなじり続けた。

「アイリスの晴れの舞台だから絶対遅れないでって行ったはずでしたわよね？　なのにあなたは

いつも仕事が忙しいとかこつけてこういう場所を避けてばっかり――！　時々は父親らしい仕事くらいしてはいかが？　それともアイリスより権力を伸ばすことのほうが大事ですの？」

「シエラ……言い争いは帰ってからしよう」

「今日だってあなたが遅れなかったら今頃アイリスとジェイナスの婚約発表を滞りなく行われてたはず。暗殺者に邪魔されなかっただろうし、ミュラーニッヒ子爵だって死ななくてもよかったかも知れない――！」

　また始まった――ケンヴィードはシエラの激しい口激を聞いて呆れたようなため息をついた。

　こうなればあとは怒りが収まるまで何も口出ししないのが吉。

　これだから無敵の『烈火の剣聖』は嫁の口喧嘩には勝てないとか変な噂が立ってしまうのだ。

「わかったから。シエラ――だからちょっと邪魔しないで欲しい」

「じゃあ、今からこの夜会を潰した暗殺者を八つ裂きにしてあそばせ！『烈火の剣聖』と言われるあなたなら楽勝ではなくて？」

　シエラのその一言にケンヴィードは呆れたようなため息をついてそれを了承した。

　そうするしか彼女は黙ってくれないことをケンヴィードは重々知っていた。

「――ところで、シエラ」

　ケンヴィードはそう言うと周囲を少し見回しながら聞いた

「アイリスはここにいないのか？」

「え……？」

　そう言うとシエラも周囲を見回し愛娘アイリスを探した。

　だがそこにいるのは彼女の側に居たはずの許婚ジェイナス一人しか居なかった。

「ちょっと、ジェイナス。あなたアイリスと一緒ではなかったですの？」

　シエラのその鋭い言葉にジェイナスは少し臆するように言った

「え……アイリス？　部屋に帰ったんじゃなかったのですか？」

「馬鹿をおっしゃい……私はてっきりあなたと一緒だと――！」

　その言葉を言った瞬間、シエラの顔が真っ青に染まっていった。

　その瞬間気づいたのだ。愛娘アイリスが暗殺者がうろつく屋敷内に取り残されていることを

「まずいな……」

　ケンヴィードはその瞬間初めて顔に焦りの色を見せた。

　一応アイリスには戦える術は一通り教えているが、今日は婚約発表の日。戦えるような格好ではない。

「ちょっと、ケン！　早くアイリスを連れ戻して頂戴！　暗殺者の処刑はその後で良いですわ！」

　狼狽えているのはシエラも同じだった。

　急に顔に強い不安を出しながら扇で顔を強く扇いでいた。

「わかった」

　ケンヴィードは一言そう言うと私設警備兵を二人連れ颯爽と歩き出した。

　そして一言こう言い残してその場を立ち去っていった。

「お前らは先に帰っておけ。あとはすべて俺が片付ける」

６　ザガロの初仕事

　レヴィは勝手だ――

ザガロはミュラーニッヒ邸の細く長い廊下を疾走しながらそう何度も恨んだ。

　全くの初心者である自分を差し置いて自分一人だけさっさと潜入してしまうなんてなんと不親切な先輩なんだろう。

　敵陣の中たった一人素人のザガロが残された後はとにかく悲惨だった。

　屋敷内までは敵の目をかいくぐりながらたどり着いたものの、おそらくレヴィがやらかしたのだろう――屋敷に入った途端警備のレベルがぐんと上がり早々と警備兵に見つかってしまった。

　なんて散々な暗殺魔法士デビューだろう。

　別に汚い仕事なんだからレヴィの綺麗に立ち振る舞うなんて無理なのはわかってはいたが、今の所やったことは逃げ回っている事くらいだろうか。

　流石にこの展開はコレジャナイ感ばかりが先導してしまう。

「いたぞ！暗殺者だ！」

　追っ手は次から次へとやってくる。

　ザガロはまた新手が出たことに舌打ちすると、床に左手を付けた

「我が血に眠る【死】を司る蛇よ――汝に告ぐ。此の邪悪なる者どもの命を――奪え!!死の途(デスロード)!!」

　ザガロの口から自然と詠唱が紡がれる。

　左手から伸びる廊下の一本道は血のような真紅に染まりそれは魔血警備兵の足元までゆっくりと伸びていく。

そして――

バースト

「発動！」

　その結の言葉で血の道は足元から魔血警備兵の命を奪った

　まるで魂の入ってない人形のようにバタバタと倒れ込んでいく。

　慣れって本当に怖い。昨日まで人を一人殺めて狼狽えていた自分が今日になると人を殺めることを躊躇わなくなっている。

　イスラーグには好都合かも知れないが、これって人としてどうなのだろう……

　どんどん暗黒面に引き寄せられている感じがザガロにとっては嫌な後味だった

　そんな時だった――

　ちょうど廊下の角、なにかキラリと光るものが落ちていた

　何だろう――ザガロはその光るものの近くまで歩んでいった。

　それは一つのペンダントだった。

　手入れの行き届いた銀の質感。スピネルの宝玉に絡みつく竜のデザイン。

　一目見ただけで価値の高そうな綺麗な装飾のペンダントだった。

　思わず息を呑みそれを取り上げた次の瞬間だった。

「いたぞ!!」

　背後から強い殺気――またしても追っ手がザガロに迫っていた。

「ホントにいい加減にしてよッ!!」

　ザガロは半分泣きが入った声でそういうとペンダントを持ったまま一目散に逃げた。
　もはやレヴィを探している暇なんてない。自分の身が大事だからさっさと逃げてしまおう

　アイツのことだ。絶対にさっさと暗殺（シゴト）を済ませて逃げてるに違いない

　廊下の四つ辻にさしかかった時――ザガロの目の前に黒い刃が掠めていった

　ザガロは思わずその場に急停止。改めてゆっくり顔を上げるとそこにいたのは――

「なんだ、ザガロか……」

　目の前に立っていたのは置いてきぼりにされた張本人。先輩暗殺魔法士レヴィが面白くなさそうな目でこちらを見ていた

「なんだ……って何だよ」

　その一言とその眼差しにザガロは不満げな表情を浮かべた。

「大体さあ、レヴィは個人プレーに走りすぎ！　いつもは一人で好き勝手出来てたかもしれないけど、今日は僕が居るんだよ」

「はあ？　何いきなり説教か？」

　その一言を皮切りにレヴィの方もザガロに対する不満が一気に噴き出した

「俺も言いたいことがある。お前こそ俺の足を引っ張るな。お陰で警備兵に追われるなんて言う不細工な始末だ」

「それ僕のせいじゃないよ。自分の失敗を人に押しつけるなんて最低だ」

「なんだとー！俺はいつも通り仕事しただけだぞ。じゃあ何でこうやって追っ手から逃げる羽目に――!!」

「いたぞ！　今度こそ逃がさないぞ！」

　その瞬間、またしても新手の追跡者が二人の目の前に立ちはだかる。

　しかも今回はいつもより大勢――どうやら相手は二人の捕縛に本気のようである。

「多いね……」

「ああ……」

「で、どうするの？」

　ザガロのその一言にレヴィは一瞬間を置いて魔法を詠唱しはじめた

「我が血に眠る【火】を司る蛇よ――汝に告ぐ。此の邪悪なる者どもを――焼き尽くせ！
　火焔壁（ファイアウォール）　!!」

　レヴィは右手を床に叩きつけた。

　その瞬間、まるで細い廊下をふさぐかのように黒い炎の壁が一斉にそびえ立った

「今の内に逃げるぞ！」

　レヴィはそう言うと踵を返して廊下を駆けだした。

「え、ちょっと待ってよ！」

　そんなレヴィを追うようにザガロも走り出す。

　こんな屋敷なんてさっさと脱出したい。二人の意志は一致していた――はずだった

　急に先を走っていたレヴィの足がぴたっと止まる

　そんなレヴィに阻まれるようにザガロの足も止まる。

「いきなり止まらないで――！」

　ザガロはまた文句を言おうと口を開いたその時だった。

　目の前に一人の少女がゆっくりと歩いてくる。

　光り輝く黄色のドレスを身に纏い、付けてる装飾品は神々しいばかり。まさにどこかの姫君と言わんばかりの魔血令嬢だった。

　だがその背格好に反してその表情は恐ろしく厳しかった。

　まるで親の敵を見るかのような空色の瞳、綺麗にアップにした長い栗色の髪は怒りで逆立っているようだった。

「あの娘――」

　ザガロには彼女に見覚えがあった。

　忘れもしない。格好は違うが昨日墓地でであったあの少女――アイリス・ラキア・ティアマートだった。

7　レヴィとアイリス

　この娘は何者だ――？

　目の前に立ちふさがった豪華な黄色のドレスを身に纏った魔血令嬢を見て、レヴィは不思議な違和感を覚えていた。

　なんと言えばいいだろう――何もしてないのに全身の血が強く騒いでいるのが手に取るように解る

　先ほどまでそんなこと全くなかったのに――一体何が起きているのだろうか？

　だが、目の前の彼女は完璧に敵だった

　彼女が手を胸の前にかざしたその瞬間、強い魔法の気配がぐんと強くなった

　それを瞬時に感じたレヴィは左手を前にかざし《シールドスペル　魔障壁》を張った。

「我が血に眠る【火】を司る蛇よ――汝に告ぐ。此の邪悪なる者どもを汝の業火で―焼き尽くせ！《スプレッドファイア　連火珠》!!」

　その瞬間、彼女が召喚した無数の小さな火球がレヴィに襲いかかった

　彼女が使った魔法はそれほどレベルが高いものではない。魔血なら誰でも使える基礎的魔法だ。

　だけどその数と威力はすこし群を抜いている。《シールドスペル　魔障壁》を張ってなかったらとんでもない事になっていただろう。

「あなた……暗殺魔法士!?」

　自分の魔法を防御された彼女はレヴィを見ながら驚きながらそう言った。

　だが魔血令嬢はそれを見ても退くことをしなかった。

　否、それを見てさらに怒りの度を強くした。

「暗殺魔法士――ゆるせない！　ここで征伐してやる!!」

　なんという威勢のよい魔血令嬢だろう――

　普通の魔血のお嬢様なら自分たちの姿を見ただけで怯えるというのに、彼女はよほど自信があるのかどんどん向かってくる。

　おそらくオートクチュールのドレス姿だというのに――なんか不釣り合いだ

「どこのお嬢様か知らないが、そんな格好するならもっとお淑やかにしたらどうだ？」

　レヴィのその一言に彼女は一瞬顔を紅潮させて反論した

「う、うるさいわね。そんなのあなたには関係ないでしょ！」

「まあいいや……世間知らずのお嬢様に世間の厳しさと怖さをい知らせてやるか」

　レヴィはそう言うと真紅の瞳に彼女をキッと睨み付けて黒い一対の短剣を抜いた

　だがそれを止めたのはなんと後ろにいたザガロだった。

「ちょっと待ってよ！　レヴィはあの娘も殺すつもりなの？」

「はあ？　お前何言ってるんだよ！」

「だって相手は女の子だよ？　いくら何でもそれは道理的に――」

　その言葉にレヴィはザガロの身体を強く押し出した。

　そして、平然とした表情で一言言った。

「いくら可愛い女の子だろうとも、魔血は魔血――俺の敵だ」

　そう言うとレヴィはザガロの前に出てもう一度立ちはだかる少女を睨んだ。

「そこのお嬢さんよ……逃げるんだったら今だぜ。後から怖くなっても遅いぞ」

「私を誰だと思ってるの？　あなたこそ見た目に騙されて痛い目を見ることね」

　しかしどこまでも勝ち気な魔血令嬢だ。

　一体どこの家のお嬢様だ？服装からして相当な有力貴族の子女だとは思うが、あまりも上級魔血だとここまで血気盛んな娘には育つはずがないのだが――

　それに――何だというのだろう？　先ほどからのこの血のざわめきは。

　この少女を目の前にしてからと言うものの自分の身体そのものが戦いを拒否反応を起こすかのように自由に動けない。

　いつもなら何の躊躇いもなく目の前の敵を排除できるはずなのに、この少女だけは意識もしてないのにそれが出来ない。

「ちょっと！　襲ってくるなら今よ!?」

　そんな膠着状態がしばらく続いて、痺れを切らした彼女は牽制の一言をレヴィに飛ばした

「なんだよ……あんたこそ今更恐れを成したか？」

「バカ言わないで！それはそっちでしょ！」

「うるさいな！　その言葉そっくり返してやる！」

「何ですって――!!」

「何だと――!!」

　その瞬間、二人の間に禍々しいほどの強い灼熱の魔力が強まっていく。

　今まで抑えていた分それはとてつもなく強力に立ち上りそして発散された。

「我が血に眠る」

「【火】を司る蛇よ――」

「汝に告ぐ！」「汝に告ぐ！」

「此の邪悪なる者どもを」

「汝の業火で――」

「焼き尽くせ！」「焼き尽くせ！」

　その瞬間レヴィからは漆黒の炎が、少女からは紅の炎が燃え上がった。

　それは自分ではコントロールできないくらい強力な魔法だった。

　そしてそれは相手も同じだった。

『　龍業炎（サラマンダーブレス）　!!』

　二人は奇しくも同じ魔法を使っていた。

　立ち上った２色の焔は龍のような造形に変化し、そして真っ先に目の前の敵に突撃していく

　どちらの魔法が勝ってもこちらにも被害はあるだろう。

　それくらい強力な魔法が目の前に迫っていた――その時だった。

「え――？」

「うそ――？」

　黒と紅の炎は触れ合ったその瞬間、急に姿を消した。

　それはお互いの魔法が相殺したというより、何か不可解な理由で消滅した――といった方が早いだろう。

　それくらい理由づけるのが難しい現象だった。

「お前――何した？」

　レヴィは訝しげな表情を浮かべ少女を睨み付けた

　彼女もこの現象を目の当たりして同じように動揺していた

「何って――何もしてないわよ！」

「嘘をつくなよ。じゃあ何で俺の魔法が消えたんだ？」

「それは――こっちが聞きたいわよ！　あなた一体何者なの――!?」

　その時だった――

　激しい足音が廊下を響かせていく。

　レヴィは新たな複数の殺気に感づといち早くその身を反転させた

「アイリス――ッ!!」

　廊下を疾走してきた女騎士は長く太い赤い刃の両手魔剣を振りかざしレヴィに斬りかかった。

　レヴィはそれを軽く後ろに跳び下がりかわしてみせる。

　次の瞬間、爆発に似た衝撃が辺りを襲う。

　その威力を見て、彼女がただの雑魚警備兵ではないことを証明していた。

「ヴェスタ！」

　少女は少し安堵した表情で彼女を呼んだ。

「アイリス……お怪我はありませんか？」

　両手魔剣をかざした女騎士はそう言うとレヴィを睨み付けた

「貴様――！　お嬢様に何をした！」

　女騎士は一言そう威嚇したその時、同時に援軍の魔血警備兵も続々とレヴィとザガロを取り囲んでいく。

どうやらこれでは分が悪いようだ――

「あいつらを捕らえろ!!」

女騎士がそう言い放ったその時、レヴィは窓側の壁に向かい手をかざした

次の瞬間、黒い爆炎がほとばしった。

「何――!!」

砕け散るガラス窓。唸る爆風に瓦礫がまじる。

その威力にそこにいる誰もが一瞬二人の暗殺魔法士の姿を見失った。

そして、ほとぼりが冷めた時にはもうそこに二人の姿はなかった。

「しまった！　逃したか――!!」

女騎士は怒りの表情を浮かべ爆発で壁に空いた穴を見た。

その先はもう外の闇。あれほど明るい庭の裏、闇がひろがる雑木林が先に広がっている

「くそ……！　あいつらを探しだせ！いいな！」

女騎士は周りの警備兵たちにそう指示を出す。

一度集まった警備兵たちはまた三々五々散っていく。

アイリスはその瞬間、足に力がなくなったかのようにその場に崩れ落ちる。

それを見て女騎士ヴェスタは彼女に駆け寄った。

「アイリス、大丈夫ですか？」

「うん……平気……大丈夫……」

アイリスは力なくそう伝えた。

　だけど本当は心の中は大嵐の真っ只中だった。

　あの暗殺魔法士――何者なの？

アイリスはその時確信した。生まれて初めて自分の血はじめて拒否した相手に出会ったのだと――

8 報告

「なるほど……夜会の主催者ミュラーニッヒ子爵を葬って、夜会会場は大混乱。同盟強化のお祭りどころじゃなくなり例の婚約を発表する事も出来なかった――と」

イスラーグ・ジェラールは今回の任務の報告を聞いて満足そうに頷いた。

もう草木も眠るような深夜。イスラーグの屋敷はまるで寝静まったかのようだったが、本人は言われたように二階の書斎で二人の帰りを待っていた。

「うん。良い働きだ。十分満足だよ」

いつもの軍服姿とはちがいプライベートスーツに身を包んだイスラーグは何回も首を縦に振り、満足そうな笑みを口元に浮かべた

「あのー。ジェラール大佐？」

「何？」

そんなイスラーグを見てザガロは煮え切らない表情を浮かべながら一つ質問した

「さっきから同盟強化とか婚約発表とかよくわからない単語がでてるんだけど……」

「ああ、それね」

そう言うとイスラーグはザガロに向かってニッコリと笑った

「君たちには一切関係ない話だ。まあ真相を聞いたって多分理解できないと思うしね」

それを聞いてザガロは少し不満げな表情を浮かべた

おそらく魔血上層部の権力闘争関係の単語だろうとは思ったがやはり自分たちは良いように使われて阻害されてる感が否めなかった。

「それにしても……ザガロ。良い働きをしたねぇ。初陣にはもったいないくらいの働きだよ」

「はあ……」

イスラーグにそう褒められてもザガロはどうしても喜ぶことができなかった。

良い働き――とは言われても自分は何もしていない。ただ侵入し損ねて、警備兵に見つかって、ひたすら逃げまくっただけの初任務だった。

おそらく一緒に任務をしたレヴィにとってはとことん足手まといの相棒だったに違いない――

「ところで、ザガロ――」

イスラーグはひそひそ声でザガロの耳で囁くとちらっとバルコニーを見た

「今日のレヴィはいつからああなの？」

「え――」

そう言われてザガロは同じようにバルコニーの柵の上に座り込むレヴィを見た

彼はただ黙ったまま手に持った何かを見つめてばかり。

そう言われてみればレヴィとはあの事態を切り抜けて以来全く会話してない気がする。

否、それはレヴィが話しかけてくるなと言わんばかりの空気を作り出しているようだった。

「まあ、あまり多くは語らない彼だけど――さすがに何かあったとしか考えられないなあ」

イスラーグはそう言うと訝しげな表情を浮かべた。

何かあった――確かにレヴィの身には何かがあったはず

ザガロが見る限りそれは急に目の前に立ちはだかったあの魔血令嬢アイリスが原因しているような気がしてならなかった。

だけど――いくら女の子だからとは言えレヴィは彼女と戦うことを躊躇ったのだろう？

最初の威勢を見ていると本当にアイリスを殺しにかかったかと思ったけど遠目に見ていてレヴィはなかなか仕掛けに行かなかった気がする

　そしてそれは魔血令嬢アイリスも同じだったような気がした。

「ザガロ？」

急に押し黙ったザガロをイスラーグは顔を覗きながらそう言った。

　それを見てザガロは少し驚いた様子で一歩足を退いた。

「どうしたの？　何か心当たりでも――」

「いえ、そんなものないです……」

　何故だろう。何故、イスラーグにはとっさに嘘をついたのだろう。

　ただ、自分の感じたレヴィの変化をあまり口外したくなかった。

　それが不確定な要素があったから？――否、もっと違う予感がザガロをそう言う突き動かしていた。

「俺、帰るわ」

　久々にレヴィが声を発したと思うと、彼はバルコニーの柵に立ち上がりそのまま跳び上がって下に降りた。

　イスラーグの目にはその態度は訝しく感じていただろうが、ザガロはそれ以上何も言えなかった。

「本当に何があったのかな？――まあいいや、あれこれ詮索しても仕方ないか」

　イスラーグはため息混じりにそういうと近くにあった椅子に腰掛けた。

「……ザガロ、本当にご苦労だったね。君も帰って良いよ」

　だが、ザガロはイスラーグのその一言を聞いてもなかなかその場を離れようとはしなかった。

　まだ言いたいことがある。そう言いたげなのが顔に書いてある。

「――どうしたの？」

　イスラーグはそんなザガロの顔をのぞき込む

　ザガロはそれにハッとして顔を紅潮させた。そして怖ず怖ずとした顔で一言イスラーグに聞いた。

「ジェラール大佐……僕はいつ暗殺魔法士を辞められるのでしょう？」

　その一言にイスラーグは一瞬驚いた表情を浮かべたが、すぐに大声を上げて笑い出した。

「あははっ！　君は何を言ってるの？」

「え……？」

「馬鹿を言うんじゃないよ。僕が何時何処で暗殺魔法士を辞めて良いなんて言った？」

　イスラーグは高笑いをしながらザガロの目の前に迫った

　その勢いにザガロは思わず足を一歩二歩と退きながら対抗した。

「でも……僕、今日の任務で自分は向いてないって気づいたんです。僕にはレヴィのような堂々とした立ち振る舞いも何も出来ないし……」

「そんなことどうだっていいさ。重要なのは君には【死】の血が流れている。それだけで君は相当強力な武器なんだ」

「でも――」

「反論は許さないよ。ザガロ」

　イスラーグはそう強く言い放つと青と緑の瞳でザガロを睨み付けた

　その恐ろしいほど冷たい視線にザガロはまるで凍り付けられたような感覚に陥った。

「君だって気づいているはずだよ。人一人殺して狼狽している昔の自分よりずっと強く鋭くなってることを――もう君は元には戻れない。戻ることはできなんだよ」

哀しい事だけどイスラーグの言葉は恐ろしいほど図星だった。

あの時何の感情もなく魔血警備兵を葬った自らの左手。慣れなのかそれとも必然だったのか、どちらにしろ自分は良い意味でも悪い意味でも少しずつ強くなっている

そして強くなればなるほど自分は元のただの墓守には戻れなくなっていく

「そう、肩を落とすことはないよ。ザガロ」

そう言うとイスラーグはザガロの落ちた肩を叩いた。

「強いって言うのは恥じゃない。むしろ誇るべきだ。それに――君はラファエラの子だ。母親から受け継いだチカラをここで使わなくてどうする――」

「ラファエラ――!!」

その人物の名を聞いてザガロはハッとした。

忘れもしない祖父の遺言に書いてあった母親とされる女性の名――それがなんとイスラーグの口からでてきたのだ。

「イスラーグ！　僕の母さんのこと知ってるの!?」

ザガロは目の色を変えてイスラーグに向かってそう聞いた

それを聞いたイスラーグは少し戸惑った表情を浮かべたがすぐにいつもの不敵な笑みをうかべた

「ああ……知ってるよ」

「ホント!?　じゃあ父さんも――」

「安心していいよ。ギルティスも存命だ」

その言葉を聞いてザガロは不思議な安堵感を覚えた。

今まで祖父の遺言にしか見てなかった両親の足がかりをやっとつかまえたような気がしていた

しかし――それでも疑問が残る。

何故イスラーグは行方不明である両親のことを知っているのだろうか？

「また何か言いたそうな顔してるね。ザガロ」

イスラーグはそう言うとまたザガロの顔をのぞき込んだ。

見透かされてる――そう思ってザガロは急に緊張した面持ちになった。

「まあ、君の母親は国家機密だから今ここでは多くは言及できない。でも、安心して欲しい。君の両親は僕たちが保護している限り安全だ」

国家機密――僕たちが保護している――

まるで想像つかない単語がイスラーグの口からこぼれていく

一体父親と母親はどういう状況に置かれているのか、そしてイスラーグがどうやって二人に関係しているのか――沢山の疑問がザガロを突き動かす。

だけど――今、それをイスラーグに問いただすことがザガロはできなかった。

イスラーグの青と緑の瞳がそれを強く拒んでいる――そんな無言の圧力にザガロは屈しようとしていた

「いろいろ聞いても答えてはくれないよね……」

「すまない。これだけは答えられないよ」

そのつぶやきにイスラーグはニッコリ笑って言った。

「だけど、君の両親は僕たちに護られている――これがどういう意味かわかるかい？ザガロ」

その言葉にザガロは小さな沈黙のあとかすれるような小さな声で言った。

「あなたには逆らえない……そう言いたいのでしょう？」

「まあ、そう言うことだね」

　その一言にイスラーグは満足そうな表情を浮かべた。

　何だろう……この悔しい気持ち。

　ザガロは唇を噛みしめそして拳を握る。イスラーグにそれを悟られまいとしようとしたが、やっぱり自分が未熟としか言えなかった。

「そうだ……長居ついでに君に紹介したい人がいる」

「え……？」

　もう帰るよ――ザガロがそう言うまもなくイスラーグは手を叩いて使用人を呼んだ。

「ティディエをここに呼んできてくれ……」

9　【水】の暗殺魔法士

「本当はレヴィとも顔を合わせてあげたかったんだけど、彼先に帰っちゃったからねえ」

　イスラーグはソファにゆっくり座ると長い足を右に組んだ。

「あのさ……イスラーグ」

「ん？」

　ザガロは顔に困惑の色を隠さずイスラーグに聞いた。

「こんな時間に、僕みたいな奴に合わせたい人って誰？」

　その一言にイスラーグは涼しげな顔にニッコリ笑みを浮かべてみせる

「君の仲間になる子だよ」

「え……？仲間？」

　それってどういう意味？　そう言おうとしたその時、ぐだぐだとした文句と共にイスラーグの書斎のドアが開いた

「……ったく。こんな真夜中に何の用よ。イスラーグ――」

　不機嫌そうな言葉を伴って入ってきたのは一人の魔血の少女だった。

　齢は16歳くらいだろうか――身体の成熟の割にセクシーなボディスーツを着ていてちょっとアンバランスにみえるが、白に近い金色のポニーテールが印象的で海のように青い瞳はどこか引き込まれそうな不思議な魔力があった。

「私ね、あんたみたいな夜型人間じゃないんだ。だからさっき寝てたら叩き起こされたもんだから――」

「暗殺魔法士になりたいのに夜型は嫌なんてわがまま言わない。任務の大半は深夜の夜討ちだよ」

「えー！めんどくさいなー！　生活リズムが崩れたらお肌が荒れちゃう」

奔放な少女の言動にイスラーグは若干困った顔を浮かべた

まさかと思うが、あのイスラーグを手玉に取っているのがこの魔血の少女だというのか？

そんなザガロは顔にたくさんの？を浮かべながら彼女を呆然と見つめていた。

「あ、そうそう。ザガロ、紹介するよ――」

イスラーグは一つ息を吐いた後、彼女を自分の側に呼んだ。

「彼女はティディエ・エミュール。【水】の血の暗殺魔法士だよ」

「え……？【水】の暗殺魔法士……？」

ザガロはその紹介を聞いてとてつもなく動揺した。

イスラーグがさらっと紹介した彼女が暗殺魔法士だとは到底信用できない

それくらい――彼女は穢れというものを知らない清廉潔白の乙女にしかザガロには映ってなかった

「で、この子だれよ」

ティディエと呼ばれた少女は不機嫌そうにイスラーグにそう問い詰める

「ああ、彼は――」

「ザガロ・ディアルグレイだよ！」

ザガロはイスラーグが紹介する前についつい先走って自己紹介していた

なんだ？僕、おかしいな――ザガロは自分の心の異変に薄々気づいていた。

ぶっちゃけて言うと、性格は別としてティディエ・エミュールはザガロの好みにストライクな存在だった。

「……この子も暗殺魔法士なの？」

　だがティディエの不機嫌な表情は直ることなく淡々とイスラーグに聞いた

「そうそう。この前言ったでしょ。【死】の血の暗殺魔法士だって――」

「ふーん……」

　そういうとティディエはザガロの足先から頭の上までじっくり舐めるように見つめていく。

　ザガロはその視線にちょっとしたトキメキを覚えながらも、舐められないようにその気持ちを胸の奥にしまい平常心を心がけて彼女の前に立った

　しかし、ザガロを見たティディエの感想は余りに意外だった

「……なんか弱そうね。あなた」

「え――？」

「ねえ、イスラーグ。先輩の暗殺魔法士に会わせてくれるって言ったのにこんなもやしなんて聞いてないー！」

　ティディエが放つ辛辣な言葉にザガロの精神はかなり堪えた

　そして次にやってきたのはどこから湧き出したか解らない怒りだった。

「黙って聞いてりゃいい気になりやがって――」

　ザガロは低い声でそう威嚇すると金色の瞳でティディエを睨んだ

「人を見かけで決めてもらっちゃ困るなあ。君だって今まで１度も人を殺したことないでしょ？」

「な――っ!!」

　ザガロのその一言にティディエは思わず絶句した。

「ほら……やっぱり」

　そんなティディエを見てザガロは少しだけ優越感に浸ったような笑みを浮かべ言葉を続けた

「僕だって人のこと言えないくらいこの世界は浅いけど、まだ一度も人を殺したことがない君には言われたくないよ。どうして暗殺魔法士を目指したのかは知らないけど魔血のお嬢様の遊びでやるような世界じゃない！」

　大々的にそう見栄を切ったはいいが、よくよく考えてみればつい最近この世界に入った自分が言えるような台詞だったのか――ザガロは言い終えてからそんな疑問が湧いた。

　そして徐々に自分の言葉に自信が持てなくなりザガロは小さな声で「ごめんなさい」と言おうとしたその時だった。

「お遊びなんかじゃないわ……私は本気よ……」

　ティディエは低く震える声で一言そう言った。

　その鬼気迫った雰囲気にザガロは一瞬おののいた。

「お遊びだったら今まで血反吐を吐くような訓練に耐えられたものじゃないわ。あの男に復讐をしてやる――ただその一念だけで私は本気で暗殺魔法士を目指してるの！」

「あの男――？」

　ザガロのその一言にティディエの表情は更に険しくなる

　そして呪いを吐くかのようにその名を言った

「ケンヴィード・セラフ・ティアマート――」

　ティディエの口から出たその名を聞いてザガロは思わず仰天した。

『烈火の剣聖』を最大の仇と抜かした彼女――一体どう間違ってそこまで思うのだろう

「ティディエは１０年前まで有力魔血貴族の子女として裕福な生活を送っていた。だけどあの日彼女の父親は突如ある魔血貴族に殺されてしまう。その相手が――『烈火の剣聖』ってわけさ」

　イスラーグはそう説明すると深いため息をついた。

「たまたまティディエの父親と僕が親しかったから僕が彼女を引き取ったけど、暗殺魔法士になりたいというのは僕の意志じゃなくティディエ本人の意志だ。ティアマート卿を殺したい一心で彼女は驚くほど強くなった。まあ実践はこれからだけど十分使える『武器』だと僕は思ってるよ」

　十分使える『武器』――その言葉を聞いてザガロはティディエも同じように手駒にされるだけの存在なのかと落胆した。

　自分の意志じゃないとイスラーグは否定したが、どちらにしろ彼女の復讐心を煽って旨く使おうという魂胆が見え隠れして胸の奥で怒りに似たものが生まれた

「ねえ、イスラーグ。いつ私はティアマート卿を殺せるの？　その日が待ち遠しくて私ワクワクしちゃう」

　だが当のティディエはそんなことを気にする素振りもなくただ夢である復讐の達成を邁進している様に見えた。

「急いじゃダメだよ。ティディエ。君は確かに強いけどザガロの言うとおりまだ実戦経験がない」

　イスラーグはそんなティディエを諌めるように言った。

「でも――」

「なーに、あの人は逃げも隠れもしない人だ。君の復讐はもっと準備してからゆっくりと攻めていけばいい」

　その一言にティディエは「つまんなーい」と言い頬を膨らませた。

「ところで――ザガロ」

　イスラーグはそう言うとなにか言いたげな顔をしているザガロを緑と青の瞳で見た

「何か言いたいなら今だよ。別に怒らないから」

　そう言うとイスラーグはにこっと笑みを浮かべた。

　それを見てザガロは一瞬戸惑ったがすぐに言葉を整理してイスラーグに思い切って話を切り出した。

「あなたは一体僕らに何をさせたいの？」

「何って？」

「一体何の目的で――こんな汚い仕事を請け負うの？　やっぱり魔血同士の権力争いに僕らを利用しているの？」

　それを聞いてイスラーグはいきなり声を上げて笑い出した。

　そして、彼は青と緑の瞳を光らせその問いの答えを言った。

「半分正解だよ。ザガロ――だけど半分は間違ってる」

「間違ってるって――」

「僕はね――【水】をさらなる高みに上げるためにこの世に生まれてきたんだよ」

　その言葉を聞いてザガロは思わず息を呑んだ。

「確かに権力争いに君たちを使っているのは事実。それを使って【水】の権力を更に高く持っていこうと利用している――それが僕の役割だと理解しているよ。こうしてこうして誰の追随を許さない高い魔力を使い軍部の中枢にいるのもすべて【水】の権威のため。僕はそのために生まれてきたんだ」

　そのために生まれてきた――イスラーグが繰り返したその言葉を今のザガロは理解することは出来なかった。出来るはずがなかった。

　だがその言葉の真実を知るときはもうそう遠くの話ではなかった。

10　火蜥蜴御殿の夜は更ける

帝都魔血屋敷街の北東部、森に囲まれたのどかな広大な一つの屋敷

白亜の大邸宅の至る所にサラマンダーの彫刻――【火】の盟主ティアマート家の邸宅別名『火蜥蜴御殿』

　夜も更けようとした頃、その火蜥蜴御殿に慌ただしく馬車が到着した。

　そこに乗っていたのは暗殺者に邪魔されたミュラーニッヒ邸での夜会から帰宅したアイリスだった。

「はあ……疲れた」

　アイリスはため息混じりにそう言うと特注の黄色いドレスを引きずり屋敷の中に入っていく。

　疲れるのも仕方がない。自分の婚約発表だと母にだまし討ち同然で連れて行かれた夜会が暗殺者に邪魔され、その襲ってきた暗殺魔法士と一戦交えてしまったのだから――

　でも、アイリスは自分が疲れた理由はもっと別にあるような気がした。

　どう言ったらいいのか解らないが、まだ血が騒いでいる。あの暗殺魔法士と対峙したその時から、ずっと。

「まあ、アイリス！　無事で何よりで!!」

　アイリスがリビングに入った途端、母シエラの安心した笑顔が迎えてきた。

「私、とても心配しましたのよ……あなたの姿が見えなくなった時は本当に肝を冷やしましたわ。もし、暗殺者があなたに危害を加えてきたと思ったら――気が遠くなりそうですわ」

「大丈夫よ、お母様。暗殺者なんて――敵じゃないわ」

「まあ、何その口ぶり――まるで暗殺者と戦ったような……」

　アイリスはその言葉を母に言った瞬間、少ししまったという色を顔に浮かべた

　シエラにだけにはそれを悟られたくはなかったがついつい口を滑らせたのが運の尽きだった。

「あなた……その格好で暗殺者と戦ったと？　全くもう、信じられませんわ」

　そう言うとシエラは扇を取り出し強く顔をあおぎだした

「本当にあなたの血の気の多さは何処の誰に似たのでしょうね。ちなみに私の家系ではありませんわよ。私の実家ラングース家は雅な家系ですからね――」

「ほう……まるでアイリスが俺に似たと言わんばかりだな」

　その言葉を吐いたのは遅れてリビングに入ってきたケンヴィードだった。

「あなたが悪いのですのよ？ケン。必要もないのにアイリスに魔剣なんか教えたりするからこの子がこんな血気盛んに育ったのをお解り？」

「こんな物騒な世の中、娘に自衛の手段を教えるのは間違ってないと思うが？」

「そういう意味ではありませんわ！　この子には魔剣の扱い方よりも貴族としてのの教養をもっと教えるべきですわ。こんな暗殺者と好んで戦う娘なんて――将来が心配でなりませんわ」

　シエラの丁々発止の反論にケンヴィードはまるでこれ以上相手に出来ないと言わんばかりに深いため息をついてソファに座った。

「もうこんな遅い時間に喧嘩なんてやめてよ」

　アイリスは少し不機嫌そうな顔を浮かべ一言そう言った

　どうして自分の両親はいつもこうなのだろう。顔を合わせれば喧嘩、口を開けば喧嘩――それならどうして結婚したのだろう？

「そうですわね……もうこんな時間ですわね」

　シエラは窓の外の闇を見てそう言った。

「あーあ、今日は散々でしたわー。ホント疲れましたので私はこの辺で失礼しますわ」

　そう言うとシエラは扇で顔を仰ぎながら急ぎ足でリビングを後にする。

　母が去りリビングに父と二人きりになったアイリスはアップにしていた髪をほどくとケンヴィードの隣にちょこんと座った

「しかし、アイリスには毎回手を焼かされるな」

　そう言うとケンヴィードは煙草をくわえると人差し指を立たせそこから小さな火をだし煙草に火を付けた。

「まさかそんな格好で暗殺者と戦ったとはな……流石におてんばがすぎやしないか？」

「あら？　お母様の言葉を借りるようだけど、私をこんな風に育てたのはお父様よ」

「まったく……減らず口は一人前だな」

　ケンヴィードはそう言うとため息と共に口から煙を吐いた。

「だがな、アイリス。これだけは言っておくが。お前の身体はお前一人のものじゃない。お前が傷つくことになればお前の周りの人みな悲しむ――それだけは肝に銘じておけ」

　ケンヴィードの真剣な忠告にアイリスはそれ以上反論が出来なかった。

　確かに父の言うとおりだ――例え自分の強さに自信を持っているからとは言、えそれが周りの人に迷惑をかけたり悲しませる事だってある。

　それを強く感じたアイリスはそれに対する答えがしばらく出なかった。

「でもまあ、そんなお前を見て人は皆さすが俺の娘だと言うんだろうな……そう言われるのは悪くはないが、お前がその評判に浸かるとなると――控えてる婚約にも悪い影響があるかも知れない」

「婚約――」

　アイリスは父の口からその言葉を聞いて一瞬緊張した。

　だがケンヴィードは煙草を咥えながら彼女の肩を抱き寄せて言った

「アイリス、この婚約嫌なら断っても良いんだぞ」

「え？」

「お前は俺とシエラを間近に見て同盟のための結婚に疑問を持つ気持ちもわかる。いくら相手が仲良くしていた幼馴染みとはいえお前の小さな肩に同盟を背負わすのは俺も気が引ける。だから――」

「心配しないで。お父様」

　父の心配の言葉を聞いて、アイリスは気丈に笑った

「確かに同盟のための結婚なんてまっぴらご免よ。だけどそれ以前に私はジェイナスが幼馴染みとして好きなの――まあ、結婚相手としてはちょっと……だけどね」

「アイリス――」

「お父様やお母様には悪いけど、本音を言うと今日暗殺者があの夜会を潰してくれてよかったと思ってる。お陰で婚約発表なんてぶっ飛んじゃったし……」

　そう言うとアイリスはドレスの右胸に挟んでいた手紙を取り出した

　宛名は自分の父、ケンヴィード・セラフ・ティアマート。文字はとても繊細でとても丁寧。美しい女性がしたためたのがつぶさに解る

　浅黄色の短い髪、そして黄色と紫のオッドアイ、そして口ずさんだ「暗殺者」という言葉――あの魔血の少女は一体何者なのだろう

「なんだ？　その手紙は？」

　そんなアイリスの手の中の手紙を見てケンヴィードは彼女から手紙を取り上げようとした

「ああ、ちょっと待って！」

　アイリスはそう言うと父の手から手紙を護ろうとした

「なんだよ。それ俺宛なんだろ？」

「そうなんだけど……」

　そう言うとアイリスは手紙を胸に抱いて困った表情を浮かべた。

「確かにお父様宛なんだけど――差出人がわからないの。私もあの混乱の中でたまたまこれを拾って――」

　アイリスが説明している側からケンヴィードは彼女の手から手紙を奪ってしまう

　そして何の躊躇いもなく封を切るとサラサラと流し読みした

「お父様――」

「安心しろ。アイリス」

　そう言うとケンヴィードはアイリスを横目で見て笑った

「この手紙はラブレターでも何でもないよ」

「え？」

「確かに俺宛の手紙だが、ちょっと内容に色気は見あたらないな。まあ差出人は女だろうと思うけど」

　そう言うとケンヴィードは手紙をベストのポケットにしまった

　一体あの手紙に何が書かれていたのだろう――流石に父の顔にそれを見つける手がかりはなかった。

　本当にあのオッドアイの魔血の少女が差出人なのだろう？　それだとしたらなぜ自分の父宛の手紙を出したのだろう？

　沢山の謎は膨らむばかり――だけどそれをケンヴィードに尋ねることもできなかった。

「なんか疲れちゃった――ってあれ？」

　アイリスは席を立とうとして首にしていたネックレスを外そうとした

　しかしそのうち一つのアクセサリーが一つ無くなっていることに気づいた

「どうした？アイリス？」

「ない！　ないの！　お父様から貰ったペンダントが！」

　アイリスはそう言うと首の所を必死にまさぐる

　しかし、あの混乱の時どうやらペンダントをどこかに落としてしまったらしい

「ああ、あの火蜥蜴（サラマンダー）のペンダントか……」

　ケンヴィードはそう言うと自分の首にかけてたペンダントを取り上げた

　スピネルの宝玉にからみつく火蜥蜴（サラマンダー）の造形――それは300年の歴史を持ちかの【火の国】の王家の血筋を組む名門ティアマート家の家紋を現すペンダントだった

　ケンヴィードは狼狽えるアイリスにそのペンダントを首からかけてあげる

「お父様――いいの？」

　アイリスは困惑した様子でケンヴィードにそう尋ねる

　だがケンヴィードは黙ってニッコリ笑いアイリスの栗色の髪を撫でた。

「おやすみ、アイリス」

　優しげな父の表情。そして温かい父の大きな手――それを感じただけでアイリスは不思議と不安な気持ちが無くなってた。

　アイリスは父から貰ったペンダントを愛おしく胸の奥にしまうとソファから立ち上がりそのままドアの方まで駆けていった。

「お父様――」

　本当は「おやすみ」と言いたかった。

　だけどその瞬間アイリスの脳裏に今日出くわしてしまった暗殺魔法士のことが蘇った。

　あの時の感覚は忘れない。まるで体中の血が暴れ回りまるで戦いを拒むかのように身体が硬直したあの時――

「お父様、血が騒ぐって事ある？」

　アイリスは部屋を出るその瞬間、その言葉を無意識にケンヴィードに投げつけていた

「え……？」

　アイリスの唐突な質問にケンヴィードは戸惑いの表情を浮かべた
。
　その質問をしたアイリスもすぐに正気を取り戻し、急に取り繕うかのように一言言った。

「おやすみなさい！」

　そう言うとアイリスはドレスの裾を引きずりながらリビングを出て行く。

　一体どうしたって言うんだ――ケンヴィードはアイリスが残した唐突な質問のことを考えた。

　おそらく今日の彼女にはいろんな事が起こって色々整理できないのだろう――そう考えたいのは山々だけど……

「血が騒ぐ――か」

　ケンヴィードはそう呟くと先ほどアイリスから受け取った手紙にもう一度目を通した。

　その文章はとても繊細でとても丁寧でまるで細い糸によって綴られていた錯覚を起こすような女性的な文字で書かれていた。

【拝啓

　突然の非礼な書簡で驚きかと存じます。

　私は訳あって名が名乗れない人間ではありますが今日はあなた様の危機を知らせに火急な一筆をしたためました。

　あなた様が『烈火の剣聖』として先の大戦で活躍し、さらに政治家として帝国改革に尽力されているのは知っております。

　特に、非魔血への人権擁護に理解があると言うことはこちらとしても感謝いたしております。

　それ故に、あなた様には敵が多いと聞きます。

　現状維持を主張する根の腐った保守派の魔血たち、さらには彼らの命令であなた様の命を狙う暗殺者…

　あなた様が天下無双の魔法剣士であると言うことは重々解っておりますが、もしあなた様の命が曝される事になれば改革の目が詰まれこの国は再び暗黒時代へと戻るでしょう。

　　あなた様に比べ私は非力な人間です。それ故にあなた様の力を頼りにしておりますし、あなた様がこの国を変えてくれると信じております。

　力のない非魔血たちにとってあなた様が権力の座に着くことしか救う道がないのです。

　血による差別など、なくなってしまえばいい！非力な私は強くそう思うばかりです。

　ここまで長々と差出人のない不躾な手紙を読んで頂き恐縮でございます。

　最後にあなた様が目指される帝国は私たちが夢見る帝国の姿そのものでございます――

　ケンヴィード・セラフ・ティアマート様

名もなき非力な女より】

「この手紙――一体だれが書いたというのだ……」

　ケンヴィードは手紙を前にして不思議そうに自分の顎髭を触った

　暗殺に気をつけろ？　非魔血に対する差別をなくせ？　それとも自分に対する応援の手紙なのか？

　まあどちらにしろ、この手紙に綴られている通り、自分は今帝国内の改革に乗り出していることは確か。

　そしてその中には非魔血に対する差別をなくすことにも言及しているのも事実だった。

　これを書いたのは非魔血――？　否、アイリスは夜会会場でこれを拾ったはずだとしたら――一体この手紙の主とは何者だ？

　非魔血側に立ってる魔血が居るとでも言うのか――？

「まあいい――」

　ケンヴィードはそう言うと吸っていた煙草を手の中に入れて握った。

　そして手を開くと煙草は灰になりそのまま風に飛ばされていった。

11　母の形見

一体俺はどうしたというのだろう――

レヴィはただ宛てもなく歩いていた。

イスラーグへの報告もザガロにすべて任せて先に帰ったはいいものの、そのまま家へと直行することをやめ、ただ深夜に寝静まった帝都の宛てもなくうろついていた。

今日は多くある任務のただ一つの任務だと思っていた。

任務としては簡単だった。ただ潜入して夜会をぶち壊すだけ――依頼者（クライアント）はそれだけを望んだ。

確かにその任務は達成したと思う。自分はともかく一緒に着いてきたザガロが侵入に失敗したようでその分簡単に夜会は潰れた――

だけど、レヴィには一つだけ疑問に残るものがあった。

それは追っ手から逃げようとしていたときに自分たちに対峙してきた一人の魔血令嬢。

いつもなら何事もなく彼女を排除出来たはず。だけど彼女と対峙した時それが出来なかった。

レヴィは感じていた。

彼女と戦うな――そう血が命令した。

何でだろう。ただの魔血のお嬢様なのに何故血は彼女と争うことを拒んだのだろう。

先ほどからその理由を色々考えてみては脳裏から消しているけどやはり答えは見つからない。

ただ、時間ばかりが更けていく。

レヴィはふと足を止めると胸にかかっていたペンダントを取り出した

それはスピネルの宝玉に龍が絡みついた――いつ見ても手の込んだペンダント。

それを見る度レヴィはある声が脳裏の中に蘇る

『レヴィ……このペンダントがあなたをお父様の所へ導いてくれる――』

　やっぱり嘘だよな――

　レヴィはそう思いすぐにペンダントを胸にしまった。

　どうしてこのペンダントはそんな期待ばかり持たせるのだろう。

　自分に厄介な血だけ残して捨てていった父親なんて――こっちから願い下げなのに。

　だけどそんな厄介なペンダントは哀しい事に母の形見でもあった。

　いつも肌身離さず持っているのは父親に会いたいのが半分、母親を感じたいが半分。

　母さん――

　どうしてこんなものを残したの？　本当にこのペンダントで父親に会えるの？

　だけど、もう何もかもが遅いよ。

　自分は暗殺魔法士として父親が属しているはずの【火】を標的（ターゲット）にしている。

　おそらく父親と会う公算は暗殺魔法士と標的（ターゲット）という関係でしか会えないだろう

　その時、俺はどうする？　自分の血に逆らって父親を殺すか？　それとも自分の血を受け入れるか――

　どちらにしろそれは大分先の話――それはその時考えればそれでいいか

　レヴィはまた寝静まった街を前を向いて歩き出す。

　どんな運命が来ても準備は出来ている。自分はただそれを切り裂くだけ――それだけが進む道だと信じてた。

12　研究工場（ファクトリー）

一人の魔血の少女があろう事か非魔血居住区のスラム街を一人で歩いていた

　浅黄色のショートヘアー、真っ白いドレスそして両手にはヒールの折れた靴――

　まるで磁器のように白い素足でスラム街の舗装されてない汚れた道を歩く姿はとても奇異に見えるであろう。

　だが彼女はそれを苦にもせず、ただひたすら目的地まで駆けていく。

　彼女が向かう先、それは非魔血たちから『研究工場（ファクトリー）』と呼ばれる場所。

　スラム街の大通りの四つ角にその場所はあった。

「ただいまー！」

　彼女は入り口扉を開くと開口一番そう言った。

『研究工場』の中は相変わらず雑然としている。大量の書物、大量の薬品が『研究工場』には収まりきれず居住スペースまで圧迫していた。

「やだ。セドナ……遅かったじゃない」

　そんな彼女を見て、駆けつけたのは黒髪のおかっぱヘアーのスラッとした美人の非魔血の女だった。

「あんた、余りにも遅かったからもしかして魔血に捕まったんじゃないかと思ったわ……」

「ごめん、ごめん。ちょっとトラブルがあっちゃってね」

　そういうとセドナと呼ばれた魔血の少女は非魔血の女にヒールの折れた靴を手渡した。

「ごめん、途中で折っちゃった」

　それを見て非魔血の女は「別に気にしてないよ」と笑った。

「――で、どうだったの？首尾は？」

　非魔血の女は汚れた足を洗うセドナに楽しげにそう聞いた

「んー結論から言うとダメだったわ」

「あらー残念！」

　そう言うと非魔血の女は少し悔しそうな顔でしかめた。

「せっかくランクスが考えた完璧な作戦だったのになあ……【火風同盟】の夜会に魔血に紛れてセドナを送り込む。絶対ばれないと思ったんだけど」

「ううん、失敗の理由はそれとは別。ランクスの作戦は本当に完璧だったわ」

　そう言うとセドナは「服着替えてくる」と言い『研究工場』の奥へと駆けていった

「じゃあ、どうしてうまくいかなかったの？」

「それはね――」

　セドナがその理由を言おうとしたその時だった。

　汚れたドレスを着替えようと『研究工場』の奥へ行こうとしたその時、セドナは一人の非魔血の男と出くわす

　ぼさぼさの金髪頭にメガネに覆われた青い瞳。風体は白衣姿でいかにも研究員と言った感じだ。

「おう、セドナ。今日何処行ってたんだ？」

　非魔血の男がそう言うところでセドナは「じゃあね」と言って更衣室に入っていった。

「ん？　今日何かあったっけ？」

　いまいち、話に入ってこれない非魔血の男は、次の瞬間足に激痛を覚えた

　隣を見ると非魔血の女がにこにこ笑いながら彼の足を踏んづけていた。

「あれー？ランクスったら今日が何の日か忘れたのかしら？」

「何の日かって――」

「あんたが最初に言い出したっけ？【火風同盟】の夜会にセドナ送り込んでティアマート卿に接触しようって」

「それって今日か……ってエリオル！痛いつーの!!」

　ランクスはそう言うとエリオルに強く踏まれた足をどかしてもらおうともがきはじめる

　それを見てエリオルは腕を組んだまま足をどかしてあげた。

「ったく、お前はいつも乱暴だなあ」

「ごめんなさいね。これが本性なんで」

　そういうとランクスエリオル夫妻は互いに顔を見せ合い目が笑ってない笑顔を浮かべた

「――で、どうだったの？　ティアマート卿には会えたの？」

　エリオルはまるでセドナの話を急かすように聞いた

　だが着替え中のセドナは深いため息をついてから言った。

「だめよ。やっぱりあのお方の社交界嫌いは相当なものね……なかなか会場に現れなくてはっきり言って焦ったわ」

「まあ、あんな場所で会える方が稀な人だからなあ……ティアマート卿は」

　ランクスは頭をかきながらそう言うとため息をついた。

「ところでセドナ。俺の論文は誰かに渡したのか？」

「それなんだけど……」

　そう言うとセドナは少し申し訳なさそうな声で返した。

「会場が混乱してたからどこかで落としてしまったのかな……気づいたときには無くなってた」

「会場が混乱してたって？」

　エリオルのその問いにセドナは声を潜めて答えた

「暗殺者が会場に侵入したみたいなの……だから夜会は吹っ飛んじゃって、あとはもう酷い有様で――」

「ふーん」

　セドナのその言葉にエリオルは意味深に頷いた。

「【火風同盟】に反発する【水】の仕業かしら……だとしたらあの依頼者（クライアント）が怪しいわね」

「おーい、エリオル。昔の職業病がまた出てるぞー」

　ランクスのその一言にエリオルは一つ咳払いをした。

「でも……私、出会っちゃったんだ」

「何に？」

「暗殺者」

　セドナのその一言にランクスもエリオルも凍り付いた。

　だがセドナはそのまま言葉を続けた

「会ったのは一瞬だったけど覚えてる。相手は非魔血だった。艶やかな黒髪に燃えるような赤い瞳の非魔血の少年――」

　そう言うとセドナは怒りにも似たため息を一つついた

　なんて愚かな人なのだろう――いくら使われてるとは言え、言いつけ通りただ魔血だけ狙って

くるなんて暗殺でも何でもない。ただの殺人だ。

　魔血にも色々居て革新的な考えを持つ人もいれば保守的な考えを持つ人もいる

　それなのにただ闇雲に魔血ばかり狙うのはいくら何でも間違ってる。

　おそらく今日の彼には何も知らされてないのだろう――今日あの場に集まった【火】と【風】の魔血はどちらかと言えば革新的魔血貴族たち。

　彼らはもしかしたらこの魔法帝国にはびこる非魔血に対する差別を取り除く可能性があるというのに――

　セドナは更衣室のカーテンを大きく開けた。

　そこにいたのは育ちの良さそうな白いドレスを着た魔血令嬢ではない

　赤いタイトな服にデニムのミニスカート。見るからに活動的なスタイル

　そして、彼女はゆっくりと目を開ける

　その目は金色と紫色の異質な輝き――魔血には珍しいとされるオッドアイだった。

「ともかく今日は運がなかった。それだけよ」

　セドナは一言そう言うと安物のソファに腰をかけた

「まあねえ……暗殺者が現れたんじゃどうしようもないな」

　ランクスはため息混じりにそう言うとふと隣で黙り込んでいる妻エリオルを見た。

　彼女は小声でぶつぶつと独り言を言っていた。

「どうしよう。多分今回の黒幕はアイツだろうから、関係者にちょっと聞いてみようかな……」

「エリオル――どうした？」

「え――？」

　エリオルはその瞬間ハッと我に返りランクスとセドナを見た。

　そして取り繕うように固まった笑顔を浮かべた

「やだなあ。何でもないわ」

「――お前、また昔の職業の伝で物事解決しようと思っただろ」

　そんなエリオルを見てランクスは彼女をじとっと睨み付けた

「エリオル……何回も言うけどお前はもう足を洗ったんだから、お願いだから元の職業に関わることは辞めてくれ。それは俺と結婚するときに誓ったよな」

「ええ……それは約束だけど……」

　エリオルはそう言うと口をへの字に曲げた。

「でもね、ランクス。あたしの頭の中には大体今回の事件の構図はおおよそ出来上がってるのよ」

「だがそれはお前の推測だろ――」

「バカ言わないで。そんなに疑うならこの場で真犯人教えてあげようか？」

　そう言うとエリオルは深く息を吸って一気に吐き出した

「狙われたのは【火風同盟】の大夜会。しかも今回は同盟強化の為の政略結婚の婚約発表が控えてた。それを目の敵にするのは――【水】に他ならないわ。特に【水】の宗主オアネス・サドゥ卿の周りはきな臭く、大量の暗殺者を囲って送り出してる人物が居るの！それが――イスラーグ・ジェラール大佐よ」

「え……あの『絶対零度』の？」

　セドナのその一言にエリオルは黙って頷きそして言葉を続けた。

「アイツ――最近えらい動き回ってるから怪しいとは思ってたけど案の定よね。あたしの古い友人にアイツの息のかかった暗殺者達を取り仕切ってる人がいるの。多分その人に聞けば話は早

い――」

「ちょっと待て、エリオル」

　その言葉を聞いてランクスは強い口調でエリオルの話を遮った

「お前、まさかまだあの店に通ってるのか？」

「あの店って？」

「『ブラッド・ウィキッド』だよ！」

　その問いにエリオルは平然とした様子で肯定した。

「情報収集だけしてるの。それ以上の関わりはないわ」

「お前なあ、あそこは完璧な暗殺者ギルドだぞ……そんなところにお前が入り浸ってたら」

「だから、あそこはマスターのパスタが美味しい店。ただそれだけ！」

　エリオルは一言そう言うと部屋の奥へと消えていった。

　夫ランクスは妻の素行が気に入らないのか苦虫をかんだような顔を浮かべていた

「あいつ――本当に足洗ったのか？」

　ランクスは不機嫌そうな表情を浮かべセドナの隣に座った。

「あいつの古い友人は確実に暗殺者仲間で間違いないからな。そんな連中とさっさと縁を切って貰いたいのが本音なんだけどな――」

「ランクス、大丈夫よ」

　そう言ったのは隣に座っていたセドナだった。

「エリオルは頑張ってるよ。研究一筋のあなたを支えようと慣れない家事を必死で頑張ってる。それに――」

「それに？」

「エリオルは多分あなたを守りたいんだと思う。だからあなたの前では絶対見せないけど暗殺者としての顔を使ってこのように情報を集めてきてくれる――ランクスは嫌かも知れないけどエリオルだって必死なのよ……」

　セドナのその一言にランクスは返す言葉が一瞬見つからなかった。

　そしてしばらくの沈黙の後少し困惑した様子でため息をついた

「俺、あいつに守られるほど柔じゃないんだけどな……」

　ランクスは安いソファから立ち上がると更に言葉を続けた

「確かに、あいつが暗殺者の顔に戻るのが今でも怖くて仕方がない。もし戻ったとしたらそのまま俺の元から飛んでいくんじゃないかと思うことだってある。だから完璧に足を洗って貰いたいと強く願ってる」

「大丈夫よ、ランクス。エリオルは絶対あなたの元に戻ってくる。それだけは信じてあげて」

　その一言にランクスはまたも沈黙する

　ランクスはやっぱり納得いってないような表情を浮かべている。

　でもそれだけエリオルのことを強く愛しているのだろう。故に彼女が抱える昔のしがらみを覗いてあげたいと思うのだろう

「あーあ、考えても無駄だな」

　しばらく沈黙していたランクスはそう言うと部屋の奥へと歩いて行く。

「セドナ。これから夜食作ろうかなと思うんだけど食べるか？」

「あ……」

　そう言われた次の瞬間彼女のお腹から限界を知らせるような泣き声が響いた

「うん、お願い」

　セドナはそう言うと恥ずかしそうに笑った。

「オッケー、まーエリオルの分も作っておいてやるか」

　そう言うとランクスは散らばった食材を拾いながら料理を作り始める

　それを見ながらセドナは一つ大きなため息をついた。

　この夜空を見ている人々に色々なことがあった一日だった。

　それは小さなきっかけのような事件だったかも知れないが、それが大きなうねりになろうとはこの夜空を見上げる人々にはまだ知るよしもない。

　ただばらばらだった彼らの運命は徐々に引き寄せられていく

　その小さなきっかけが今日という日だった。